アストロクリエイター ～惑星を創った学生たち～

Crystal

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アストロクリエイター　～惑星を創った学生たち～

【Ｎコード】

Ｎ０８４６Ｍ

【作者名】

Ｃｒｙｓｔａｌ

【あらすじ】

惑星を創造するためのクラブ「アストロクリエイター部」に所属する野乃原真菜は、装置の暴走に巻き込まれて意識不明の重体となってしまう。部員たちは入院中の真菜のために惑星を誕生させて、必ず「プラネットコンテスト」へ出場しようと心に誓う。しかし、当の真菜はというと、事故の影響で見えなくなった姿を利用して――みんなと一緒に惑星創りを続けていた。

第1話　野乃原真菜

わたしがそのクラブに入ろうと考えたのは、密かに憧れていた先輩がそこに所属していたからだった。

無理矢理参加させられたわけではない。活動内容に興味があったわけでもない。学年の違う先輩と少しでも同じ時間が過ごしたい――ただ、それだけであった。

クラブにさえ入れば先輩の夢を叶えるためのお手伝いができる。上手くすれば先輩の喜んでいる姿も見ることができる。入部したばかりのわたしにはそれが全てであった。しかし、部活の雰囲気に慣れはじめてきたころ、わたしの気持ちに若干の変化が現われた。

いったい何時……どういった理由で心境の変化が起こったのだろうか。いや、原因ははっきりしている。先輩に見せてもらった一つの惑星（ほし）の映像……。満々と水を湛える奇跡の惑星『ブループラネット』――その映像を見た瞬間からわたしの運命は変わり始めていた。

ブループラネットのような惑星を創ってみたい。憧れの先輩の夢は、そのままわたしの願いへと変化していった。

だが、惑星を誕生させることは簡単なことではない。クラブ活動に参加し始めてから二年は経過しているが、その間惑星が誕生する兆しは一度も現れなかった。

どうすれば惑星が誕生するのか、わたしたちの活動は導も無いまま時間だけが経過していく。そして、クラブ活動に参加して三年目、ついにわたしたちの惑星創りは大きく進展することになった。

それは、わたしの身体に起こった些細な変化……。そのことが影響して、わたしの生死に関わる大事件へと発展することになってしまうのだが、このときのわたしはそんな状況に陥るなど夢にも思っていなかった。

これは、後に史上最高のプラネットクリエイターと謳われるようになる野乃原（ののはらまな）真菜が関わった最初の惑星創造を記した物語である。

夏休みを間近に控えた七月中旬――朝だというのに陽射しは容赦なく地面を熱していた。
茹だるような暑さにうんざりしながらも学生たちは各々の学園へと向かっている。そんな学生たちの中に、眠そうな表情で大きな欠伸をするわたし野乃原真菜と、幼馴染みで同級生である遠野健介（とおのけんすけ）ちゃんの姿があった。

「ふぁあ～……」
「はぁ～、真菜さんは、もう少し早く起きられないもんですかね～？」

だらしなく欠伸をするわたしの姿を見て、健介ちゃんが呆れたようにため息を吐く。その声を聞いて、わたしは慌てて眠気を呑み込んだ。

「そ、そんなこと言ったって～」
「普通は逆だろ！　オレが寝過ごしていたら、幼馴染みの女の子が優しく起こしに来てくれるってパターン！」

なぜか泣きそうな顔をする健介ちゃんに、わたしはおもわず苦笑してしまう。何がそんなに哀しいのだろう……。それに、そんなことを大声で叫ばれても、わたしにはどうすることもできない問題である。
実のところ、健介ちゃんに起こしてもらったのは今日が初めてではなかった。いや、朝が苦手なわたしは、ほとんど毎日健介ちゃんに起こしてもらっているといっても過言ではない。
当然、わたしも早起きの努力はしている。目覚まし時計は三分刻

みに五つほどセットしているし、オーディオの自動再生も活用している。それでも起きられないのだから、健介ちゃんには仕方のないことだと諦めてもらうしかないだろう。

それに、どういうわけだか健介ちゃんに起こしてもらうとわたしの寝覚めが良い。そのため、お母さんも無理にわたしを起こそうとせず、迎えに来た健介ちゃんに任せっぱなしなところがある。健介ちゃんには申し訳ないが、わたしの平穏な学園生活のためには、これからも毎日起こしてもらわないといけなかった。

まぁ、健介ちゃんにしてみれば、別の意味で問題を感じているのかもしれない。

文句を言いながらも毎朝起こしてくれているのだからもの凄く嫌……というわけではないのだろう。何かあるとするならば二人の年齢。そう、今年からわたしたちは私立学園の高等部に進学していた。つまりは、幼馴染みとはいえ異性に起こされる年頃の女の子というのは如何なものか――とでも考えているのではないだろうか。

確かに寝顔を見られて少しは恥ずかしく感じるものの、幼い頃からの恒例行事であるためかそれほど苦痛というわけではない。健介ちゃんには、感謝こそすれど抗議できる立場ではなかった。

「それじゃあ、また今度――わたしが健介ちゃんを起こしてあげ……」

「無理だな」

「……」

問答無用な切り返しにわたしは唖然としてしまう。文句の一つでも言いたいところだが、不可能という意味では健介ちゃんの方が正しかったりした。

「だいたい真菜は～」

「ほ、ほら健介ちゃん。早く行かないと遅刻になっちゃうよ」

「って、いったい誰の所為だと思ってるんだ！」

嫌な流れになりそうだったので、わたしは切り上げるようにして歩みを速める。時計を確認すると、このままでは本当に遅刻してしまいそうであった。

『健介ちゃん……、ごめんなさ～い！』

わたしは心の中で健介ちゃんにそっと謝りながら学園へと急ぐことにした。

十五分ほど歩くと、いくつもの立派な校舎が見えてくる。初等から高等までの総合学園――私立白鳳学園である。

この白鳳学園は、かつて人間神に即位される前の樹神飛鳥（こたまあすか）さまが通われていたことで有名だったりする。そのためか、入学するための競争率が極端に高く、他の難関校と呼ばれる学校の数十倍という狭き門となっていた。

とはいっても、それは他所から受験する者たちにとってのことで、地元民であるわたしたちは簡単な試験を受けることで入学・進学することができていた。それを考えると『地元で良かったな～』と神様に感謝せずにはいられなかった。

そんな風に何気なく校舎を眺めていると、突然、背中に誰かが抱き付いてきた。驚いて振り返ると、わたしたちの後輩で中等部二年生の鷲崎瑞希（わしざきみずき）がにっこりと微笑みながらしがみ付いていた。

「マナ先輩、おはようございま～す♪」

瑞希は元気に挨拶をする。

「あははっ、おはよう。瑞希は今日も元気だね」
「マナ先輩は今日も可愛いです～～～♪」

そう言って頬擦りしてくる瑞希に、わたしは圧倒されっぱなしである。いったいどこからそんな元気が湧き出てくるのだろうか。そんなことを考えていると、完全に無視されていた健介ちゃんがむっとした様子で呟いた。

「おい瑞希……。同じ先輩であるオレには挨拶無しかよ？」
「あ……。健介、おはよ～……」
「って、オレは呼び捨てかーーー！」

味気ない挨拶に健介ちゃんが怒り出す。もちろん、この遣り取りも毎日の日課であるため健介ちゃんも本気で怒っているわけではない。軽いノリのコミュニケーションといえるだろう。しかし、今日の瑞希は少しだけいつもと違っていた。

「健介は健介で充分でしょ！」
「なっ！」
「だいたい、ただの幼馴染みってだけで毎日マナ先輩と登下校なんかしちゃって～」
「み、瑞希……？」
「いい気になってるんじゃないわよ。ええぃ、マナ先輩の二メートル以内には近づくなーーー！」

まるで牙を剥き出しにして威嚇する小動物のようである。明るくて誰とでも友達になれる瑞希だったが、どういうわけか健介ちゃんには敵対心を持っていた。以前、その理由を聞いてみたこともあったが、瑞希は言葉を濁すようにして教えてくれなかった。わたしとしては、二人とも大切なお友達なので仲良くしてもらいたいのだが

――なかなか難しいそうであった。
そんな感じでしばらくじゃれ合っていたが、予鈴が聞こえていたため教室へと向かうことにする。瑞希も慌てて隣接している中等部の校舎へと駆け込んでいった。

教室に入ったわたしは、クラスメイトたちに挨拶をしながら自分の席へと着く。ポケットから個人情報の記録されているパーソナルカードを取り出し、学園のシステム端末でもある机のスロットへ差し込む。すると、半透明なモニターが浮かび上がり、わたし専用の画面が立ち上がった。
途端に小さなモニターが出現し、さきほどまで一緒だった瑞希の顔が映し出される。

『マ〜ナ先輩♪』

瑞希はニコニコ顔で喋りかけてくる。そこに、もう一つのモニターが現れ、呆れ顔の健介ちゃんが映し出された。健介ちゃんの席を見てみると、二つの小さなモニターにはわたしと瑞希が映っていた。

『おまえら、もうすぐホームルームだろうが……』
『女の子の会話に割り込んでくるなんて……。健介のスケベ、最っ低〜！』

激しく健介ちゃんを罵る瑞希に、わたしはおもわず苦笑してしまう。瑞希の健介ちゃん嫌いは相当なものだ。わたしが仲裁に入らないと、ホームルームまで言い合いを続けてしまうことだろう。
わたしは、深いため息を吐きながら、モニターへと視線を向ける。そのとき、わたしは自分宛のメールが届いていることに気づいた。
二人の言い合いを聞きながら、何気なくアイコンに触れてみる。

すると、別モニターが立ち上がり、届いていた映像メールの再生が始まった。

『え～、部長の神倉です……』

「か、神倉先輩！」

再生されたメールを見て、わたしは飛び上がるほど驚いた。それは、わたしが所属するクラブの部長、神倉昴（かみくらすばる）先輩からのメールだったからだ。

突然の大声に、クラス中の注目が集まる。わたしは、顔を真っ赤にしながらも、食い入るように神倉先輩のメールを見つめた。

メールの内容は、本日の部活が中止になったという連絡であった。わたし個人へのメールではない。はっきり言ってしまえば、部員全員に送られた単なる連絡メール……。しかし、密かに憧れている神倉先輩からのメールであることには変わりない。再生が終ったメールは、誤って消してしまわないよう、パーソナルカードの最重要フォルダへ保存しておくことにしよう。

おもわぬお宝映像の入手に喜んでいると、いつの間にか健介ちゃんと瑞希の罵り合いは終っていたようである。それどころか、二人とも同じようなジト目で、わたしを睨んでいる――ような気がした。

「え～っと……。二人とも、どうしたのかな～？」

『マナ先輩……。やっぱり部長のこと、好きなんですか？』

「ななな、なに――を！」

ずばりな質問にわたしはあたふたしてしまう。そんなわたしの様子を見て、瑞希はムッとしたようにそっぽを向き、健介ちゃんは落ち込んだように項垂れてしまった。

神倉先輩は学園でも一二を争うほど格好良い――と評判になっている。つまり、多くの女子生徒たちにとって神倉先輩は憧れの存在

なのだ。当然、わたし自身も憧れているわけだが、どうして瑞希が知っているのだろうか。わたしの気持ちなんて、一言も口にしたことがないというのに……

そうこうしているうちにホームルームの時間となった。

担任の先生がやって来て教壇のシステムを立ち上げると、健介ちゃんたちからの通信は遮断される。まだ会話途中ではあったが、授業中の個人的な通信等は一切禁止されているからだ。

挨拶を終えると、先生は手元のシステムで生徒の出欠を確認し、簡単なホームルームが始まった。

連絡事項が次々と個人端末に送信されてくる。それらのアイコンに触れてみると、拡大されて読みやすくなった。

わたしは先生の説明を聞きながら、次々と連絡事項を確認する。それほどたいした内容ではないので、軽く目を通しただけでアイコンに戻す。だが、最後の連絡事項を開いた中に、わたしの興味を引く小さな募集通知があった。

「第十五回　プラネットコンテスト開催……」

これまで何度も目にしてきた通知を読み返してみる。それは、毎年八月に開催されているプラネットコンテストの参加募集通知であった。

プラネットコンテストとは、プラネットメーカーというシミュレーション装置で擬似的に惑星を創造し、その美しさを競い合う大会のことである。

何を隠そう、わたしと健介ちゃん――そして瑞希は、惑星を創ってプラネットコンテストで入賞を目指すためのクラブ『アストロクリエイター部』に所属していた。

いや、入賞を目指すため……というより、惑星を創ろうとしていると言った方が正しいかもしれない。なにしろ、アストロクリエイター部が創設されてから十二年間、いまだ惑星が誕生したことはな

いのだから。
　現在、プラネットメーカーは、全世界で一千万台以上は稼動している。その中で実際に惑星を誕生させることができるのは、年間を通して約三十台ほどだといわれていた。
　プラネットメーカーとはそれほどデリケートな装置であり、惑星を創造することはとても難しいことである。それでも数多くのプラネットメーカーが普及している理由は、擬似的とはいえユーザー自身の手で惑星を創ることができるという夢からなのだろう。

「放課後、部室に行ってみようかな～」

　コンテストの募集通知を見たためか、わたしは部室にあるプラネットメーカーの様子が気になってしまった。部活が休みの間に、惑星創造が進展しているかもしれない。そんなことを考えてしまうと、いてもたってもいられなくなってしまった。

「まぁ、覗くだけなら問題ないよね……」

　今にして思えば、これが最初の切っ掛けだったのだろう。
　これから体験することになる不思議な出来事……。わたしの運命に関わる大きな事件の始まりであった。

第2話　プラネットメーカーの異変

古びた北校舎の地下に、わたしたちアストロクリエイター部の活動拠点があった。

階段を下って少し進むと、いかにも重々しそうな扉が見えてくる。わたしは、壁にある装置へ自分のパーソナルカードを通して――扉のロックを解除した。

パーソナルカードには、個々人の情報が記録されているだけではなく、この学園の生徒であることを証明するデータも入っている。パーソナルカードを持たずに学園の敷地内へ入れば、不審者として警備員に囲まれてしまうだろう。当然、個人画面を立ち上げることができないため授業も受けられない。学園に通うための必需品であり、別名『生徒カード』とも呼ばれていた。

学園側はパーソナルカードのデータによって生徒の行動を監視している。だが、逆に言ってしまえば、禁止されていること以外は全ての行動がパーソナルカードを使うことで認められているのだ。

金属製の扉をゆっくり開き、わたしは薄暗い部室へと入る。机や備品に注意しながら慎重に奥へ進むと、淡い光を放つ円柱状の大きなガラスケースが見えてきた。

直径三メートル・高さ四メートルほどのガラスケースで、一見すると水族館にある水槽のようである。しかし、中に浮かぶのは魚ではない。そこには真空の世界が広がっており、細かな塵やガス雲が渦を巻いていた。

このガラスケースこそ、プラネットメーカーの中核となる装置である。

ガラスケースの中には宇宙空間が再現されており、様々な現象を観察することができる。そして、何億年もかかるような恒星や惑星の誕生を、わずか数週間で再現してしまうもの凄い装置でもあった。

プラネットメーカーは、今から二十年ほど前に発売されたシミュ

レーション装置である。本体はそのままに基本ＯＳを乗せかえることでバージョンアップも可能となっていた。アストロクリエイター部が使っているプラネットメーカーは、装置こそ十二年前のものだが、ＯＳは三年前に発売された最新のバージョン？であった。

宇宙空間を再現し、実際の恒星や惑星を創るなど当時では考えられない技術だったという。噂によれば、ここと違う異世界の技術を使って開発されたそうだ。

現在の最先端技術をもってしても、プラネットメーカーをゼロから再現することはできないといわれている。プラネットメーカーの装置を解析しようとしている研究者も存在しているぐらいだ。それらを考えると、異世界の技術が使われているというのもデマではないのかもしれない。まぁ、わたしたちユーザーにしてみれば、どんな凄い技術で出来ていようが関係ないわけだが――

っと、装置の説明はこれぐらいにしておいて、今は惑星の状態を確認することが先決である。わたしはガラスケースを覗き込むように近づき、宇宙空間の様子をジッと観察した。

「う～ん、この調子なら今年のコンテストも見送りかな～……」

昨日とまったく同じ光景にわたしは大きなため息を吐く。ガラスケースの中には、塵やガス雲が漂っているだけで、大きめの岩体すら見当たらなかった。

プラネットメーカーでの最終的な目標は、直径一メートルほどの惑星を創り上げることである。それには、まず自ら光や熱を発する恒星を誕生させなくてはならない。惑星とは、恒星が誕生するときに発せられるエネルギーによって誕生するとされているからだ。

ただし、恒星を創るための正しい手順はない。同じ手順を踏んだからといって、必ず恒星が出来るわけではない。また、上手く恒星を創り出せたからといって、惑星も誕生させられるとは限らない。恒星誕生は、あくまでプラネットメーカーの第一段階なのだ。

ある意味、恒星や惑星の創造は『偶然』に頼る部分が多いのも事実である。それでも惑星創造に挑戦するユーザーが多いのは、社会人の平均月収約二ヵ月分で揃えられる装置の手軽さや、さきほども言ったが自分たちの手で惑星を創ることができるという夢からなのだろう。

「数値的にも変化なし……っと」

予想はしていたが、わたしはメインコンソールのモニターをチェックして落胆する。八月末に開催されるプラネットコンテストを目指しているのであれば、この段階で何らかの反応が欲しいところであった。

このまま何の反応も無ければ、第一段階である恒星の創造は失敗したことになる。どれだけ時間を掛けようが、恒星や惑星が誕生することはない。そうなれば、現時点での環境をシステムリセットして、候補空間探索から始めなければならない。つまり、ここ数ヶ月で収集したデータは、まったくの無駄になってしまうわけだ。

しかも、プラネットメーカーのシミュレート回数には制限がある。一つの基本ＯＳにつき僅か九回だけ――惑星誕生に挑戦することができるのだ。

現在、アストロクリエイター部のプラネットメーカーは八番目の環境となっており、既に七回はシステムリセットを繰り返したことになる。決して安くはない基本ＯＳの購入を考えると、簡単にシステムリセットをするわけにはいかなかった。

わたしがアストロクリエイター部に参加したのは、今から二年ほど前のこと……。それからは、失敗とシステムリセットの繰り返しであった。

プラネットメーカーは、解説書通りに進めれば必ず惑星が創れるという装置ではない。そんな難しさも面白いところではあるのだが、ここまで無反応だと本当に惑星が創れるのか心配になってしまう。

「早く――星に育ってね……」

ガラスケースに手を添えて、わたしは祈るように呟く。そのとき、ケース内で起こっているある異変に気づいた。ガス雲の中心に黒い点のようなものが浮かんでいたのだ。

「まさか、星の……恒星の誕生！」

今までにこんな現象は一度も見られなかった。わたしはおもわずガラスケースを覗き込んだ。

黒い点は激しく回転しながら周りの塵やガス雲を集めている。心なしか、黒い点が少しだけ大きくなったように思えた。

まさに、話に聞くような恒星誕生の瞬間である。わたしは黒い点を食い入るように見つめた。

「そ、そうだ。みんなに――神倉先輩に知らせなきゃ！」

プラネットメーカーの様子は常に記録されており、明日になれば恒星誕生の様子を確認することができる。しかし、みんなが待ち焦がれていた恒星の誕生である。吉報は早めに知らせたほうが良いだろう。

わたしは、急いで学園から配給されている携帯端末を取り出し、パーソナルカードをスロットに差し込む。コミュニケーションツールを立ち上げ、神倉先輩へ連絡するためにアドレス帳を呼び出した。だが、最後に通話パネルを押すだけとなったとき、わたしはあることに気づいてしまった。

「か、神倉先輩に……通信！」

全身に嫌な汗が流れる。緊張のためか、わたしの指はプルプルと震えてしまう。心臓が激しく鼓動し、徐々に身体も火照ってくる。こんなことがなければ、わたしから神倉先輩に通信を入れるなど考えられなかったはずだ。

「すぅ～はぁ……、すぅ～はぁ～～～」

顔を真っ赤にさせながら、わたしは無意味な深呼吸を繰り返す。傍から見たらかなり間抜けな光景であろう。それにしても、通話パネルを押すだけというのに、これほど緊張してしまうとは我ながら情けなく感じてしまう。

もちろん、いつまでもこんなことをしている場合ではない。覚悟を決めたわたしは、震える指を無理矢理に動かして、神倉先輩へ向けての通話パネルを押した。

コール音を聞きながら、わたしのドキドキはさらに増していく。着信履歴が残るため、いまさら後戻りもできない。後は神倉先輩が出てくれるのを待つだけであった。

恒星の誕生……。わたしはそう信じて疑わなかった。

そのことで、ある出来事に気づくのが遅れてしまう。プラネットメーカーに発生した黒い点が、激しく回転しながら徐々に膨れ上がっていたことを――

『野乃原さん？　野乃原さんから通信をくれるなんてはじめてだよね。いったいどうしたの？』

携帯端末のモニターに神倉先輩の顔が映し出される。その途端、口から心臓が飛び出てしまうかのように焦ってしまった。

「かかか、神倉先輩……ですか！」

わたしから連絡しているわけだし、映っているのも神倉先輩である。頭の中が真っ白となったわたしは、自分で何を言っているのかわからなくなってしまった。
神倉先輩は、わたしのそんな様子に気を悪くすることもなく、優しく微笑んでくれている。その笑顔こそ、わたしを慌てさせている原因だということに、神倉先輩はまったく気づいていないのだろう。

『今日はごめんね。急に部活を休みにしちゃって』
「そ、そう！　部活！」

なかなか話し始めないわたしを気遣って、神倉先輩からそんな話題をふってくる。その言葉を聞いて、わたしは何のために通信したかを思い出した。

「神倉先輩。じつは今、部室に来ているんですけど……」

待望の恒星誕生である。わたしは、神倉先輩が喜ぶ姿を想像しながら、プラネットメーカーのガラスケースに視線を向けた。

「……え？」

わたしは、そのときになってはじめてプラネットメーカーで起こっている異様な出来事に気づいてしまった。
ガラスケース内には、さきほどと比べものにならないほど大きな黒い塊が浮かんでいる。その塊は、時折放電を繰り返し、激しく回転しながらガラスケースぎりぎりまで膨れあがっていた。

「な……、なに――これ？」

驚きのあまり、わたしは手にしていた携帯端末を床に落としてしまう。

『野乃原さん……。どうしたの野乃原さん！』

異様な状況を感じ取ったのか、神倉先輩がわたしの名前を大きく叫んでいた。しかし、ぱにくっているわたしには、それに答えている余裕はなかった。

いったい何が起こっているのだろう。わたしは恐る恐るガラスケースに近づいてみる。ガラスケースは触れなくてもわかるほど熱気を発していた。

突然、ピシッといった音が聞こえ、ガラスケースにひびが入る。よほどの熱や力が加わらない限り、厚さ二十センチもある特殊ガラスがひび割れることはないはずだ。その途端、部室内に危険を知らせるアラーム音が鳴り響く。わたしは慌ててメインモニターでプラネットメーカーの状態を確認した。

「重力レベルが限界値を超えている……。これって――ブラックホール！」

そんな仮説に辿り着き、わたしは愕然としてしまう。だが、いつまでも呆然としているわけにはいかない。アラーム音に思考を阻害されながらも、わたしは必死になって解決策を見つけようとした。

「そ、そうだ！　座標軸を変更することができれば！」

現在稼働中のプラネットメーカーは、第一座標固定――恒星誕生の候補空間を選択している状態である。選択された候補空間内であれば、座標軸を自由に動かすことも可能なはずだ。

システムリセットをしてしまえば簡単なことかもしれないが、そ

の場合、シミュレート回数が減ってしまうだけではなく――全てのデータが失われてしまうことになる。予期せぬ事態とはいえ、はじめてアストロクリエイター部のプラネットメーカーに変化が現れたのだ。貴重なデータだけは、なんとしても残さないといけない。

候補空間を選択するときのように、座標軸をずらすことができればこの現象も収まるはずだ。わたしはメインコンソールの操作パネルを起動させる。だが、システムがフリーズしているのか、操作パネルはまったく反応してくれなかった。

ガラスケースは隙間もなく黒一色に染まっており、装置の外へも放電現象が起こっている。わたしは、改めて事の重大性に気づかされた。

もはや一刻の猶予もない。下手をすればブラックホールが暴走し、プラネットメーカーや部室を取り込んで、周囲にも甚大な被害を及ぼしてしまう可能性だってある。

わたしは、慌ててメインコンソールの足元にあるアナログ式のリセットボタンへと手を伸ばす。

『野乃原さん、野乃原さん！』

床に落とした携帯端末から神倉先輩の声が聞こえてくる。その声を聞いて、わたしの胸は引き裂かれるように痛んだ。システムリセットをすれば、全てのデータが初期化されてしまう。これまでがんばってきた環境が――わたしの独断によって一瞬にして消えてしまうことを意味していた。

どががっ！　プラネットメーカーの一部が爆発を起こす。どうやら、本当に悩んでいる暇はなさそうだ。

「神倉先輩、みんな……、ごめんなさい！」

祈るような気持ちで、わたしはリセットボタンを一気に押し込む。

その瞬間、黒い塊が急激に小さくなり、ガラスケース全体に細かいひびが走った。

そして、全ての光が吸収されてしまったかのように辺りは暗闇へと包まれる。わたしの意識もそこで途切れてしまい、プラネットメーカーがどうなってしまったのか――確認することさえできなかった。

第3話　どんなに残酷な現実であろうとも

『いやぁああっーーー！』

意識を取り戻したわたしは、おもいっきり身体を起こした。
心臓が激しい鼓動を繰り返し、全身から嫌な汗が流れ出るのを感じる。慌てて自分の身体に異変がないかを確認する。特に怪我とかはなさそうだ。

『って……、あれ？』

ふと、辺りを見回してその光景に驚いてしまう。そこはアストロクリエイター部の部室ではなく、自分の部屋にあるベッドの上だったからだ。
いつのまに戻っていたのだろう。しかも、どういうわけか制服のまま寝ていたようである。わたしは、まだはっきりとしない頭で現状の整理を試みる。そして、考え抜いて出た結論がこれであった。

『夢オチ……かな？』

そう、全てわたしの見た夢だったのではないだろうか。そもそも、プラネットメーカーが発売されてから二十年間、シミュレート中の事故など聞いたことがなかった。
変化の現れないプラネットメーカーに気持ちが焦ってしまい、わたしの希望や願望がごっちゃになってあのような夢を見せたのかもしれない。そう考えると全てに説明が付くのではないだろうか。
それにしても、我ながらとんでもない夢を見たものである。どうせ夢なら、神倉先輩のことも含めて、もっと幸せな展開にしてほしいものだ。

わたしは、身体をほぐすように、大きく伸びをする。枕元の目覚まし時計を確認すると、ちょうど八時二十分になったところだった。

『え～っと……？』

僅かな違和感を覚えながら、わたしは窓の外へと視線を向ける。窓からは朝日が差し込み、小鳥のさえずりも聞こえてくる。そこから導き出される事実……。いまは夜の八時二十分ではなく、朝の八時二十分ということだ。

サァーーーっという音と供にわたしの顔から血の気が引いてゆく。いつもなら、家を出て学園へと向かっている時間帯であった。

『ち……、遅刻ーーーーー！』

慌てて飛び起きたわたしは、そのままの身形で部屋を出る。いつもなら健介ちゃんが起こしにきてくれるはずなのに、今日に限ってどうしたというのだろうか。わたしは階段を駆け下りてリビングルームへ飛び込んだ。

『ちょっとお母さん！　どうして起こしてくれなかったの……って、あれ？』

文句を言おうと飛び込んだまでは良かったが、リビングにお母さんの姿は見当たらなかった。

こんな朝早くどこへ出かけたのだろう。だが、今はそんなことを考えている場合ではない。わたしは、必要最低限の準備だけを整え、急いで家を飛び出した。

息も絶え絶えに全力で学園へと向かう。学園近くまで来ると登校

中の生徒たちが多くなった。どうやら遅刻は免れたようだ。
学園に到着したわたしは、呼吸を整えるように大きく息を吐く。靴を履き替えて早足で教室へと向かった。

『おはよ～』

わたしは、挨拶をしながら教室に入る。しかし、誰も返事をしてくれない。不思議に思いながら見回してみると、クラスメイトの姿は疎らで、ほとんどが席を空けていた。

『あれ？　もうすぐホームルームの時間だよね……』

なにやら違和感を覚えながら自分の席に着く。気の所為かもしれないが、教室全体が暗く沈んでいるように思える。そんな雰囲気に小首を傾げていると、健介ちゃんが教室に入ってきた。
健介ちゃんは、機嫌でも悪いのかムッとしながら自分の席に着く。そのまま居眠りでもするように、机へうつ伏せてしまった。

『健介ちゃん、いったいどうしたの？』

てっきり先に来ているものだと思っていたがそうではなかったらしい。

『健介ちゃんでも、朝寝坊することがあるんだね～』

軽い気持ちで言ったのだが、健介ちゃんには無視されてしまう。かなり不機嫌なようで、うつ伏せたままピクリとも動かない。過去にも何度かあったが、この状態の健介ちゃんには、何を話しかけても返事は戻ってこないだろう。
そのとき、女子生徒たちの囁くような声が聞こえてくる。

「昨日、アストロ……の部室……」
完全には聞き取れないが、わたしたちアストロクリエイター部に関係した内容のようである。
「……事故……、野乃原さんが――」
女子生徒たちは、哀しそうな表情でわたしの机に視線を向ける。その途端、健介ちゃんが上半身を起こして、話していた女子生徒を睨みつける。女子生徒たちはばつが悪そうにして自分の席へと戻っていった。
「くそっ！　どうして真菜が……」
『……え？』
泣きそうな顔をした健介ちゃんは再びうつ伏せてしまった。
何かがおかしい――
得体の知れない不安がわたしに襲いかかってくる。女子生徒たちの話を纏めると、昨日アストロクリエイターの部室でプラネットメーカーの事故が起こり、わたしの身に何かが起こったということにならないだろうか。
そこで思い浮かぶのは今朝の夢である。あれは、本当にあれは夢だったのか。
わたしは事実を確認するため北校舎にある部室へと向かうことにした。
北校舎に到着すると、雰囲気が明らかに普通ではなかった。
普段はわたしたち以外の人がいること自体珍しいのに、今日に限

っては大勢が押し寄せている。みんな、地下へと向かう階段の方を眺めてなにやらヒソヒソと話していた。
人集りを抜けるようにして中央階段へ辿り着く。階段には進入禁止のテープが張られており、通行できないようになっていた。

『なにが――どうなって……』

頭の中が真っ白となり、わたしは呆然と立ち尽くしてしまう。ふと、近くの人集りに目を向けてみると、そこには数人の中等部の生徒と一緒に瑞希の姿があった。わたしは、いったい何があったのかを聞こうと瑞希に近づく。だが、瑞希の様子を見て、おもわず息を呑んでしまった。

『み……ずき？』

瑞希は真っ青な顔色で中等部の友達にしがみ付いている。ガタガタと身体を震わせながら、今にも崩れ落ちそうな状態であった。

『ちょっと、瑞希！』

慌てて声をかけるが瑞希からの返事は戻ってこない。しばらくすると、瑞希の瞳から大量の涙が溢れ出した。

「うっ、ううっ……。マナ――せんぱーーーぃ！」
『……、えっ？』

大声で泣き始める瑞希に、わたしは鈍器で殴られたような衝撃を覚えた。
どうやら瑞希にはわたしの声が届いていないようである。いや、この様子なら姿も見えていないことだろう。

ということは、健介ちゃんにもわたしの姿が見えていなかった可能性がある。そう考えると、教室での態度も納得ができた。
まるで、この世界からわたしの存在が消えてしまったように思えてしまう。
少し冷静になって考えてみよう。姿が消えてしまうなど、現実にあるはずがない。そうなるとこれは夢の中の出来事であって、実際のわたしはまだ自宅で眠っているのではないだろうか。
健介ちゃんがなかなか起こしにきてくれないので悪夢を見続けている。そうでなければ、今のわたしは肉体を持たない幽霊のようで――

『わたし……。死んじゃったの……？』

そんな仮説に辿り着き、わたしはゾッと身震いをする。
今の状況はリアル過ぎてとても夢だとは思えない。また、ブラックホール発生も実際に起こった現象で、わたしはそれに巻き込まれる形で命を落としてしまったのでは……。幽霊となって無意識のうちに自分の家まで戻り、制服のまま今朝まで眠っていたのではないだろうか。
それらが事実だとするならば、プラネットメーカーのリセットボタンを押してからの記憶がすっぽりと抜け落ちてしまっている。そして、全ての答えは進入禁止となっている地下にあるはずだ。
わたしは、フラフラと階段に近づき進入禁止のテープを跨ぐ。そして、地下に続く階段を下り、プラネットメーカーのある部室へと向かうことにした。

部室に到着するまでにたくさんの人とすれ違った。白衣を纏った研究員のような人や警察官と思われる人たちである。やはりというべきか、他の人にわたしの姿は見えないようで、進入禁止であるに

も関わらず誰にも注意されることはなかった。
開きっぱなしの扉から部室の中を覗き込むと、大勢の人たちが何かを調べているようであった。覚悟を決めたわたしは、ゆっくりと奥へ足を踏み入れる。そして、部室内の光景を見たとき、わたしの震えは止まらなくなってしまった。
プラネットメーカーのガラスケースには無数の細かいひび割れが刻まれており、中に広がっていたはずの宇宙空間は跡形も無く消滅している。装置の一部や備品を置いていた棚などは何かが爆発したかのように吹き飛ばされており、部室内は直下型地震が起こった後のような酷い惨状であった。
この状況から判断すると、今朝見た夢……いや、昨日の放課後に起こった出来事は全て現実のようである。
プラネットメーカーが暴走して、緊急リセットしたが間に合わずに大爆発を起こした。その爆発に、わたしは巻き込まれてしまったのだろう。そして、わたしの姿が見えなくなってしまったことから考えられる事実は一つしかない。わたしは、昨日ここで死んでしまったようだ――

『あ、あははっ……、キッツイな～……』

考えたくはないが事実であれば受け止めなくてはならない。だが、死んでしまったというのであれば、いったいこれからどうすれば良いのだろうか。
事故現場である部室に地縛霊のように留まるべきか。はたまた成仏するために努力したほうが良いのか……。誰もわたしの存在に気づかないのだから相談することもできない。
わたしは、どうすべきなのか途方に暮れてしまう。そのとき、わたしは床に落ちているある物に気づいた。それは、学園から配給されているわたしの携帯端末であった。
何気なく拾い上げて壊れていないかを確認する。ちゃんと画面は

立ち上がるし、パーソナルカードの情報も失われていなかった。

『よかった～。神倉先輩のメール、ちゃんと残ってたよ～』

昨日保存したお宝メールが残っていてホッとする。しかし、自分の行動に違和感を覚え、おもわず間の抜けた声を上げてしまった。

『って、あ……れ？　どうして手に持てるの！』

その違和感が携帯端末であると気づくのにしばらく必要とした。わたしは、手にした携帯端末をジッと見つめてみる。幽霊とは、こうも簡単に物体を持ち上げることができるのだろうか……。

さらに、わたしの姿が見えないのであれば、他の人には携帯端末だけが宙に浮いているように見えるはずである。それなのに、携帯端末を目の前で揺らしてみてもまったく驚く様子はない。まるで、わたしが触ったことで携帯端末の存在が消えてしまったかのようだった。

『う～ん……、どういうこと？』

わたしはさらに混乱してしまう。よくよく考えてみれば、今の状態になってからも物体には普通に触れることができた。校舎に上がるときも靴を上履きに替えている。幽霊のように壁抜けもできないし、実体が無いというわけではなさそうだ。

それなら、なぜ他の人にはわたしの姿が見えていないのだろう……。そんなことを考えていると、授業開始を知らせるチャイムが聞こえてきた。気づけばホームルームは終っていたようである。

急いで教室に戻ろうとしたが、こんな状態で授業を受けても意味がないことに気づく。わたしは教室には戻らず、そのまま北校舎の屋上へと向かうことにした。

第4話　プラネットメーカーの開発者

屋上に出たわたしは、ベンチに座って空を見上げる。昨日と同じような真夏日だというのに、なぜか暑いと感じることはなかった。

わたしは、携帯端末でネットに接続……ニュース速報をチェックしてみる。昨日の事故について記事を検索しようとしたがその必要はまったくなかった。

『プラネットメーカーの暴走――女子学生が爆発に巻き込まれて、意識不明の重体……』

最前列にあった記事を選択し、内容を表示させてみる。名前は伏せられていたが、重体の女子学生とは間違いなくわたしのことだろう。

現在、わたしの身体は病院に入院しているらしい。意識不明で危険な状態ではあるが、まだ生きているようである。つまり、今のわたしは生霊とでもいうのだろうか――

何にしても最悪の事態は免れているようでわたしはホッと息を吐いた。生霊でもドッペルゲンガーでも、生きているのなら元に戻れる可能性があるからだ。

ちょうどその頃、アストロクリエイター部の部室にやたら違和感のある人物が現われていた。

白衣を纏ったわたしたちと同年代ほどの女の子で、顔半分を覆い隠すほど大きなぐりぐりメガネをしている。その女の子が現われた途端、なぜか調査をしていた研究員たちの緊張が高まった。

「異常のあったシステムって、これ？」

女の子は、爆発を起こしたプラネットメーカーを見上げる。する

と、一人の研究員がやってきて、これまでの調査結果を事細かく報告した。

「システムリセットされているからシミュレーションデータも消えちゃっているわけね～。まぁ、当然といえば当然なんだけど……」

そう言いながら、女の子はメインコンソールの操作パネルに指を走らせる。なにやら複雑な操作を行いながらホームボタンに触れると、普通のユーザーなら決して目にすることのない管理者用のモニターが浮かび上がった。

モニターには意味不明な記号の羅列が映し出される。その記号はどの国のいかなる時代の言語にも該当しない。それもそのはず。それは、ここと は異なった世界でかつて使われていた古代言語であったからだ。

どうやらプラネットメーカーが異世界の技術で創られたというのは間違い無さそうである。そして、異世界の古代言語で書かれている謎の羅列は、基本ＯＳには影響されない装置自体のシステムログであった。

システムログはもの凄い勢いでモニターの下から上へと流れる。女の子はそれをジッと見つめながら、しきりに頷きを繰り返していた。

「如月さん……。何か、わかりましたか？」

異世界の言葉はこの世界の者には理解すらできないという。そのため、システムの現状は如月と呼ばれた女の子に確認するしか方法がないようだ。

「う～ん、重力値が異様に高い状態になっていたみたいだけど……、何が原因でシステムに負荷がかかったのかは詳しく調べてみないと

わからないわね～」

不意に女の子はぐりぐりメガネを外す。露となったのは、今すぐにでもトップアイドルとして活躍できそうなほど可愛い美少女の素顔であった。

「まぁ、プラネットメーカーを造った当人としては、意地でもこの事故の原因を突き止めてみせるけどね～」

女の子がにっこり微笑むと、張り詰めていた研究員たちの顔も緩んでしまう。

彼女の名前は如月優子（きさらぎゆうこ）。後に知ることとなるのだが、今から二十年ほど前、擬似惑星を創造するための装置プラネットメーカーを世の中に送り出した世紀の天才科学者であった。

ホームルームのときにでも送信されていたのだろう。携帯端末にひとつの映像が届いていた。それは、昨日の事故について、学園長による説明映像であった。

わたしは、自分の置かれている状況をより詳しく知るため、届いていた映像を再生してみる。学園長の説明によると、事故調査のためメーカーの関係者やプラネットメーカーを開発した科学者がこの学園に来ているらしい。おそらく、部室で見かけた白衣の研究員たちがそうだったのだろう。

続いて学園長は、一人の女子生徒が意識不明の重体で入院していることを告げる。そして、事故原因がはっきりして――プラネットメーカーに何も異常が無いと証明されるまで、アストロクリエイター部の活動禁止が宣言されてしまった。

『そ、そんな……』

考えてみれば当然の対策だと言えるだろう。だが、今回の一件は、間違いなくわたしが原因となっている。わたしは、自らの現状を聞かされた以上に、部活が禁止されてしまったことにショックを受けた。それに、八月末に開催されるプラネットコンテストの出場を目指しているなら、この時期の活動停止は致命的ではないだろうか。

全ての事柄が悪い方へと向かっている。

プラネットメーカーの暴走は、わたしが部室にいなくても起こっていたはずである。しかし、装置だけの事故と心身事故では、周りに及ぼす影響力が桁違いであるようだ。

『う～ん、何とかしないと……』

映像を見終えたわたしは、唸りながら考え込んでしまう。このままでは、プラネットコンテストへの参加申込みの締切日がやって来る前に、惑星創造を諦めなければならないことになる。まぁ、何とかしなければと思っても、今の中途半端な幽霊状態ではどうすることもできないのもまた事実であるのだが――

そんなことを考えながら、わたしは何気なく地上へと視線を向けてみる。授業中にも関わらず、通路を渡って北校舎にやって来る人影が目に入った。

わたしは、転落防止用の金網にしがみ付き、その人影をジッと凝視する。

『神倉……先輩と、若葉さん？』

やって来たのは、アストロクリエイター部の部長である神倉昴先輩と、同じく副部長の夏樹若葉（なつきわかば）先輩であった。

遠目でしか確認はできなかったが、二人は暗い表情のまま北校舎へ入ってくる。授業中だというのにいったいどうしたというのだろ

うか。もしかすると、クラブの代表者として、事故を調査している研究員に呼び出されたのかもしれない。
そう判断したわたしは、急いで二人の後を追うことにした。

予想していた通り、神倉先輩と若葉さんはアストロクリエイター部の部室にいた。
二人は部室の光景を目の当たりにして愕然としてしまったようである。立入禁止となっていたため、事故後の部室に入ったのはこれが始めてだったのだろう。

「真菜……ちゃん……」

おもわず涙ぐんでしまう若葉さん。変わり果ててしまった部室の惨状に、巻き込まれたわたしのことを心配してくれているようだ。
よろける若葉さんを、神倉先輩が優しく支える。普段はあまり見ることのない二人のそんな様子に、わたしの胸はチクリと痛んだ。仲の良い幼馴染みの間には、わたしなんかが立ち入れる隙間などまったく無さそうだ。

「あなたたちがこのクラブの生徒代表ね」

そこに、わたしたちと同い年ほどの白衣を着た美少女が現われる。

「はじめまして、わたしは如月優子……。プラネットメーカーを開発した科学者といえばわかってもらえるかな？」

優子さんはにっこり微笑んで神倉先輩に握手を求めた。

「如月……、優子さん？　えっと……、部長の神倉昴に――副部長

の夏樹若葉です……」

神倉先輩は小首を傾げながら握手を返す。それもそのはず、彼女は今から二十年ほど前に活躍していたアイドルグループＳＰＩＮＥＬのメンバー優子とそっくりな顔をしていたからだ。これにはわたしも驚いてしまった。

もちろん、二十年前のアイドルがそのままの姿で存在しているはずもない。おそらくは親がＳＰＩＮＥＬの熱狂的なファンか何かで、彼女と同じ名前を付けたのだろう。それにしても、ネットなどでよく見かける彼女と、本当に瓜二つであった。

「さっそくで悪いんだけど、いくつか質問させてもらうね～」

床に倒れていた椅子を起こして腰をかける優子さん。腕と足を組みながら、睨み付けるように神倉先輩へ視線を向ける。その様子は、まるでこれから尋問でも始めるかのようであった。

「昨日、爆発が起こる直前に――巻き込まれた野乃原真菜さんから通信があったんだよね？」

「あ……」

「真菜ちゃんから通信って……、本当なの昴！」

若葉さんが驚いたように神倉先輩を見つめる。わたしは、神倉先輩へ通信を入れた事実を若葉さんに知られ、恥ずかしさのあまり顔が真っ赤になってしまった。

しかし、その程度の恥ずかしさは序の口であることを、これから思い知らされることになる。神倉先輩が自分の携帯端末を取り出し、通話履歴を再生しようと操作し始めたからだ。

「昨日は部活を休みにしたんですが、なぜか野乃原さんはここに来

ていたみたいで……」
『ちょっ、神倉先輩！』

やめてもらおうと慌てて叫ぶが、なんちゃって幽霊状態のわたしの声は、悲しいかなここにいる誰の耳にも届かない――

履歴の再生が始まると、優子さんはモニターを食入るように見つめた。

他の人に神倉先輩とのやりとりを見られるのはとても恥ずかしいものである。しかも、その通信でのわたしはもの凄く舞い上がっており、第三者の目で見直してみれば、挙動不審的な痛い子状態ではないだろうか。

まさに羞恥の極みである。わたしは事故の影響で通信が途切れるまでの間、両手で頭を抱えながら悶えてしまった。

「なるほど……。プラネットメーカーに変化が現れて、それを報告するために通信をしてきた。その後、システムの異常に気づき、一人で何とかしようとしたわけね～」

驚いたことに優子さんは、わたしの声と周りから聞こえてくる音だけで状況を判断する。それも決して適当なことを言っているわけではない。実際に現場を目撃したかのように、ずばりな状況を言い当てていた。

この人、本当に何者なんだろう……。そんなことを考えていると、不意に優子さんと視線が合った。

『えっ？』

偶然に合っただけ――いや違う。優子さんは、見えないはずのわたしが立っている空間をジッと凝視していた。

わたしは優子さんの迷いのない視線に焦ってしまう。似非幽霊状

態であるわたしの姿は他の人には見えていないはずである。現に神倉先輩たちは、優子さんがどこを見ているのかを確認して、不思議そうに小首を傾げているぐらいだ。

「神倉くんに夏樹さん……だったわね。ありがとう。もう授業に戻ってもらって構わないから」

優子さんは、神倉先輩たちに視線を戻してにっこりと微笑む。

「あ、そうだ。さっきの通信履歴だけは、こちらで回収させてもらいますね〜」

そう言って、優子さんは小型端末を取り出し、長細いコードを伸ばして神倉先輩の携帯端末に接続する。素早くパネル操作して、昨日の通信履歴だけを自分の端末に移動させた。

「後のことはわたしたちに任せてちょうだい。あなたたちは何も心配することないから♪」

「あの……。プラネットメーカーの爆発は――ぼくたちの設定に何か問題があったからなのでしょうか？」

携帯端末を受け取った神倉先輩は、やや複雑そうな表情で優子さんにそんな質問をした。一部のニュースでは、わたしたちアストロクリエイター部が無茶な設定をしたため、今回の事故が発生したと伝えられていたからだ。

「まぁ、それを調べるためにわたしがここに来ているんだけど……。仮にそうだったとしても、あなたたちが責任を感じる必要はないわ」

「でも、もしかしたらその設定の……ぼくたちの所為で、野乃原さんが巻き込まれてしまって……」

「その野乃原さんって子は、事故に巻き込まれたことを、あなたたちの責任にして恨んでしまうような子なの？」
「違います！」
「真菜ちゃんはそんな子ではありません！」
『わたし、先輩たちを恨んでなんていません！』
「……、なら大丈夫。野乃原さんについても、わたしが必ず何とかするから、あなたたちは安心して授業に戻りなさい」

プラネットメーカーが発売されて二十年間、システムが不具合を起こしたという報告は一切されていないという。プラネットメーカーとはそれほどまでに完成されたシステムであり、ユーザーが多少無茶な設定をしたからといって、不具合など起こるはずもなかった。
今回のような事故が起こるなど、まさに天文的確率だといえる。そのため、システム開発者である優子さんが直々に調査しに来たのだろう。
あまり納得した様子もないまま、神倉先輩と若葉さんは部室を出ようとする。わたしも何となくその後について行こうとすると、突然誰かに襟元を掴まれて仰け反るような体勢となってしまった。
驚いて振り返ると、優子さんがわたしの襟元をしっかりと握っている。

「あなたは残ってね♪」

見えないはずのわたしに向かってにっこり微笑む優子さん。神倉先輩たちは、自分たちに声をかけられたと勘違いしたのか、慌てて振り返った。

「あ～、ごめんなさいね。あなたたちはいいのよ♪」

わたしの姿が見えない神倉先輩たちには、優子さんの行動がとて

も奇妙に映っていることだろう。神倉先輩たちは、頻りに小首を傾げながらも部室から退出していった。

番外編　２５７　「野乃原真菜と聞いて思い浮かべるイメージは？」（前書き

あ……、「ラズベリル☆ショート劇場（文字だけ４コマ）」に載せるつもりが、更新する作品を間違えてしまいました。すみません（ぺこり）

でも、まぁ、真菜のネタなので、しばらく削除せずに載せておきますね。

番外編　２５７　「野乃原真菜と聞いて思い浮かべるイメージは？」

４コマ劇場　アイオライト＿３５０・・・・・２０１０／０６／３０
シリーズ３
タイトル「野乃原真菜と聞いて思い浮かべるイメージは？」

★　１コマ　★
ショウの部屋にて・・・

アリス
「え～、今回は同一作者小説『なんちゃらプラネット』および」
「現在連載中の『アストロクリエイター　～惑星（ほし）を創った学生たち～』の主人公」
「野乃原真菜さんについて、いろいろと考えてみたいとおもいます♪（にこっ♪）」

効果音「どんどんひゅ～ひゅ～ぱふぱふ～♪」

ショウ
「・・・・・・・（汗）」
「いきなりだな～おい（大汗）」

アリス
「ってことで～」
「ショウは、真菜について・・・どんなイメージを持ってる～？」

ショウ
「ん～、真菜先輩？」
「そうだな～～～」　↑　考え中

★　2コマ　★

アリス
「ほら～、真菜って主人公のクセに特徴無いっていうかさ～」
「まぁ、真菜は主人公の中でも一般人代表だから仕方ないか～～～」

ショウ
「一般人代表？」
「違うだろ」

アリス
「えっ？（汗）」（何が違うの？）

ショウ
「真菜先輩って、リーンウィックのマスターだろ」
「つまり、四聖界勇者隊の一人だ・・・」

アリス
「・・・あぁあああーーーーー！！（どびっくり）」（そういえばーーー！！）

効果音「ずががーーーーーーーーーーん！！」

★　3コマ　★

ショウ
「超龍神リーンウィック」
「時空族トラピッチェ・クリスタルが創りし四聖界の神」
「超獣神が一体・・・」
「そのマスターである真菜先輩が」
「どう間違えたら一般人代表ってことになるんだよ？（大汗）」

アリス
「そっかそっか～」
「真菜ってば巨大ロボットのパイロットだった～（笑）」

ショウ
「しかも、リーンウィックの機体性能だけではなく」
「真菜先輩の隠された時空力のこともあって」
「超獣神の中でも最強クラスの強さだ・・・」
「長年グランゾルに乗って戦ってきたダイなんかひと捻りだぞ！！」

アリス
「ひどっ！！」
「相変わらずダイの扱いひどいね～（苦笑）」

ショウ
「で～、真菜先輩のことは置いといて～」
「この４コマにおいての一般人代表というのは」
「こいつみたいなヤツのことをいう・・・（ぼそっ）」

突然の登場♪

ダリン（マンダリン・ガーネット）　↑　魔界の姫です♪
「って、何が一般人代表かーーーーー！！（うぎゃーーーーー！！）
」

アリス
「おぉ～、なるほど♪」

ダリン

「なるほどって何だーーーー！！（うにゃ～～～～～！！）」

★　４コマ　★

ところ変わって四聖界にて・・・

説明文「巨大な機兵たちが辺りを埋め尽くしている！！」

リーンウィックの操縦空間にて・・・

リーンウィック（ぬいぐるみ型）　↑　メインコア

『真菜よ・・・』

『大変な戦いになってしまったな・・・（大汗）』

真菜

「これってアレだよね・・・」

「リアルなガンダム無双？（大汗）」　↑　何千何万という敵モビルスーツを連続で倒すゲーム

「油断してると一瞬でやられちゃうね～（どきどきどき）」

リーン（ぬいぐるみ型）

『大丈夫！』

『わたしと真菜が力を合わせれば』

『たとえ敵機兵が何百万こようとも！！』

真菜

「な、何百万は嫌かな～～～（苦笑）」（疲れるよ～）

リーン（ぬいぐるみ型）

『・・・・・・・（大汗）』

真菜
「でも、まぁ～」
「ここで時空盗賊団を倒さなければ」　↑　Ｗｉｉリモコンを手に取る
「四聖界の平和は戻らない・・・」　↑　Ｗｉｉヌンチャクを構える
「リーンくん、気合入れていくよ！（よしっ♪）」　↑　リモコンの電源ボタンを押す

リーン（ぬいぐるみ型）
『おぉおおおっ！！（叫び）』

真菜
「っていうか、なんでわたし」
「こんなところでロボットバトルしてるんだろう・・・（涙）」

リーン（ぬいぐるみ型）
『ちょっ、真菜！』
『戦いに集中しろ！！（大汗）』

説明文「野乃原真菜、四聖界の勇者として順調に成長中～♪（爆）」

★　コメント　★
４コマの真菜は、巨大ロボットで戦っています！（笑）

第5話　如月優子のひみつ

「あなたが、野乃原真菜さんね♪」

突然、見えないわたしと喋り始めた優子さんに、他の研究員たちは怪訝な顔をする。いきなりひとりごとを始めたのだ。当然の反応と言えるだろう。

「あぁ～、みんなは気にしないで調査を続けてちょうだい」

困ったように苦笑した優子さんは、呆然とするわたしを引きずるように部室から出た。そのまま中庭までやってきて、木陰のベンチに腰を下ろす。

『あの……、わたしが見えるんですか？』

なんとも間抜けな質問である。優子さんの言動から考えると、見えているに決まっている。だが、どうしても聞かずにはいられなかった。

「ちゃんと見えてるし、声も聞こえているよ～」

『いったいどうして！』

「う～ん、変なことには慣れてるっていうか～、わたしの存在自体――超常現象に近いものがあるから……」

意味不明なことを呟いた優子さんは、自分で口にした内容になぜか落ち込んでしまう。

「ねぇ……、わたしって何歳ぐらいに見える？」

『え？　わたしと同い年ぐらいか、少し年上――』
「今年、三十八歳になります……」
『えぇぇぇぇーーーー！』

最初は何かの冗談かと思った。しかし、パーソナルカードの個人データを見てもらって、心底驚いてしまった。優子さんの生年月日は、間違いなく今から約三十八年前を証明していたからだ。
パーソナルデータは個人を証明するものであり、改竄されるなど普通では考えられない。しかも、年齢を若い方に誤魔化すのならともかく年上に見せるなど意味のないことである。つまり優子さんの年齢は、パーソナルデータが示す通りということになる。
まさに生きる超常現象――どうやら優子さんは普通の人では無さそうだ。

『だから、生霊になったわたしを見ることができるんですか？』

普通ではないのだから特殊な力でも持っているのだろうか。単純にそう考えたのだが、どうやらそうではないようである。

「あなた……、生霊じゃないわよ」
「え？」
「あなたは幽体でも霊体でもない。なんていうか～、今のあなたは――この次元に存在していないのよ」
『……、……はぁ？』

上手く説明できないのか、優子さんは奇妙な身振り手振りを加える。説明している本人すら考えが纏っていないわけだから、突拍子も無い話を聞かされたわたしが理解できるはずもなかった。
『この次元に存在していないって……、いったいどういうことなん

ですか？』
「つまり～、爆発があったときに何らかの力が働いて、肉体を離れた魂だけがここと少しだけ違う世界に飛ばされちゃったのよ」
優子さんの説明では、わたしの肉体と魂の間に、時空のズレのようなものが生じているらしい。そのズレを何とかしない限り、肉体と魂が重なり合うことはなく、一生このままの状態であるという。
『魂だけが飛ばされたって……。わたしはここに存在しているし、物だってちゃんと持つことができるんですよ！』
わたしは、携帯端末を取り出して優子さんに突き出す。他の人には見えなくなってしまったが、今でもしっかりと手に持つことができる。魂だけの存在になったというのであれば、説明がつかないのではないだろうか。
その問いかけに優子さんは唸りながら考え込んでしまった。
なんともいえない沈黙が場を支配する。何か本人には知らせたくない内容でもあるのだろうか。そんなふうにマイナス思考していると、優子さんはわたしが予想もしていなかったことを呟いた。
「う～ん、その辺はわたしの専門じゃないから、はっきりとわかんないのよ……。ごめんなさいね～」
優子さんに謝られてもしようが無いことだが、まさか専門外だからわからないという答えが返ってくるとは思わなかった。
状況を全て把握している優子さんに任せておけば問題ない。そう考えていたわたしの思惑は見事に外れてしまったようだ。
「とにかく、あなたがそうなった原因を調べるためにも、プラネットメーカーのシステム異常を解明する必要があるわね～。野乃原さ

ん、事故の様子を詳しく説明してもらえるかしら？」
『あ、はい……』
わたしは、プラネットメーカーにブラックホールと思われる球体が出現したことや、暴走を止めようとしてリセットボタンを押したことを拙い言葉で説明した。状況を説明するなどあまり慣れていないため理解し辛い箇所も多かったと思うが、優子さんは黙ってわたしの話を聞いてくれていた。
『で～、気づいたら自分の部屋で寝ていたんです……』
「事故による記憶の混乱はよくあることだし、無意識のうちに魂だけが帰宅したのでしょうね～」
そのことについてはあまり関心が無いらしく、優子さんは簡潔に説明して話を切り上げる。そして、これまでの真面目な態度を一変するように、ややにやけた顔で次の話題へと移った。
「そんなことより……。あなた、あの神倉昴って男の子のこと、好きなんでしょ？」
最初、優子さんが何を言っているのかわからなかった。それを理解したとき、まるで漫画のように顔から火が噴出してしまった。まぁ、実際には顔から火が出るなどあるわけないのだが――
『ななな、なにを！』
「あの手の男の子は鈍そうだから、もっと積極的に自分の気持ちを伝えないとダメだよ～♪」
『ちょっ！　なんでそんな話になるんですかーーーーー！』
あたふたしながら涙目で抗議すると、優子さんはにんまりと微笑

む。わたしは、恥ずかしさのあまり、おもわず真っ赤な顔を伏せてしまった。

「でも、告白するにしても、まずは元の姿に戻らないといけないいか～……」

『こ、告白ーーーーー！』

神倉先輩に告白するなど考えられないことである。もしそんな状況に追い込まれでもしたら……。考えただけでも心臓が破裂してしまいそうだった。

そんなわたしの様子を、優子さんはジッと見つめる。

「う～ん。これは別の協力者を考えないと、精神的にキツイかな～」

『え……、協力者って？』

「ねぇ野乃原さん」

『真菜でいいです』

「じゃあ、真菜……。あなた、何でも話せる親友……もしくは、心を許せる幼馴染みとかいる？」

『何でも話せる――ですか。う～ん……。あっ、幼馴染みなら、同じクラスでアストロクリエイター部にも入っている健介ちゃんがいます』

「ほほぉ～、健介ちゃん……ねぇ～」

不意に優子さんの瞳がキラリと光る。何か悪巧みでも想い描いているかのような笑顔に、わたしは嫌な予感を覚えずにはいられなかった。

そのとき、ベンチに置いてあったわたしの携帯端末にメールが届いた。いつのまにか休憩時間になっていたようで、個人通信の禁止が解除されたようである。

「ふむ、時空のズレがあっても、通信は出来るみたいね～」

納得したかのように頷きを繰り返す優子さん。

携帯端末はわたしが触れたことで時空のズレた次元に存在している。元の世界とは似て非なるものであり、普通なら通信できるはずがない――と優子さんも考えていたのだろう。もちろん、通信が届いたということは、そんな単純な話ではないのかもしれないが……。

『健介ちゃんからだ……』

わたしはメールの差出人を確認して驚いてしまう。健介ちゃんからメールをもらうなんて初めてのことだ。

『わざわざメールをくれなくても、直接通信してくれれば――って、そうか……』

そこまで口にして、わたしは自分がどんな状態だったのかを思い出す。直接通信しようにも、わたしは意識不明の重体で、入院していることになっているからだ。

健介ちゃんは、いったいどんな想いでこのメールを送ってきたのだろう。わたしは、モニターのアイコンに触れ、届いたメールを再生してみた。

それは十秒ほどの映像メールであった。モニターに映った健介ちゃんは、とても哀しそうな表情をしている。何をするのでもなく、ただ視線を泳がせるようにしている。そして、一言も喋ることなく、映像メールの再生は終了してしまった。

『……。なにこれ？』

意味もわからず、わたしは小首を傾げてしまう。本当に健介ちゃ

んは何がしたかったのだろう。

「なるほど～、これが噂の健介ちゃんね♪」

『噂のって……』

映像メールを覗き込んでいた優子さんは、どういうわけか嬉しそうに微笑んでいた。

「向こうも少なからず想っているようだし、協力者は健介ちゃんに決まりかな～？」

『だから、協力者って……？』

すると、優子さんが突然わたしから携帯端末を奪い取り、目にも留まらぬスピードで文字入力を始めた。

「え～っと、大切な話があります。急いで北校舎の屋上まで来てください……」

『ちょっ、優子さん！』

「送信――っと♪」

なんの躊躇いも無く健介ちゃんにメールを送る優子さん。受信した健介ちゃんは、間違いなくわたしからのメールだと勘違いするはずだ。

入院中のわたしからのメールである。健介ちゃんもびっくりすることだろう。だが、メールの内容を信用した健介ちゃんが北校舎の屋上にやって来たとして、優子さんはいったいどうするつもりなのだろうか。健介ちゃんにはわたしの姿はもちろん、声すら聞こえていないのだから――

わたしは、優子さんに引きずられ再び北校舎の屋上へとやって来た。普段から人気も無く、もうすぐ授業が始まろうとしているため、わたしたち以外の姿は見られなかった。
屋上に着くと、優子さんは無言で校舎の端に向かい、金網越しに金緑石の街並みを眺めた。懐かしむように、また、とても淋しそうにしている。この街に、何か思い入れでもあるのだろうか……。
そうこうしているうちに授業開始のチャイムが鳴り響く。それと同時に、優子さんは振り返るように屋上の出入り口を見つめた。

「意外に早かったわね……」

すると、鉄製の扉が大きく開き、息を切らせた健介ちゃんが現れた。
健介ちゃんは、辺りを見回して、誰かを捜し始める。そして、屋上に優子さんしかいないことがわかると、奥歯を噛みしめるような表情でこちらにやって来た。

「あなたが健介ちゃんね～」
「てめぇ～、いったいどういうつもりだ……」

健介ちゃんの怒りの視線を軽やかに交わす優子さん。手にしたわたしの携帯端末を見せつけるように左右に振ると、健介ちゃんの瞳が一際大きく開いた。

『あ、あのね、健介ちゃん！』

慌てて理由を説明しようとしたが、やはりわたしの声は健介ちゃんに聞こえないようである。

「てめぇが真菜の携帯使ってメールを送ってきたのか！」

突然、健介ちゃんが優子さんの胸倉を掴む。完全にからかわれたと判断したのだろう。健介ちゃんは、今にも優子さんに殴りかかりそうな勢いであった。

こんなに怒っている健介ちゃんを、わたしはこれまで見たことがなかった。健介ちゃんは、力任せに優子さんを金網に押し付け、拳を大きく振り上げる。

『健介ちゃん！　やめてーーーー！』

哀しいことに、わたしの叫びが健介ちゃんに届くことはない。今のわたしには、優子さんに襲いかかる健介ちゃんを止めることすらできなかった。

健介ちゃんの拳が優子さんの顔に迫る。その衝撃的な光景を、わたしはまるでスローモーションのように感じていた。

だが、拳が当たろうとした瞬間、優子さんの身体が陽炎のように消えてしまう。

いったい何が起こったのか……。呆然と立ち尽くしてしまうわたしと健介ちゃん。

「やれやれ、女性の胸倉を掴んでいきなり殴りかかってくるなんて……。みっともないよ～、健介ちゃん♪」

どこからか優子さんの声が聞こえてくる。

「ちっ！　どこに隠れやがった！」

優子さんの声を聞いた健介ちゃんは、辺りを見回して怒鳴り声を上げる。しかし、優子さんの姿はどこにも見当たらない――

そのとき、わたしは地面に映る小さな影の存在に気づいた。どう

やら健介ちゃんも気づいたようで、わたしたちは同時に空を見上げた。

「やほ～♪」

北校舎の屋上から十メートルほど離れた空の上……。優子さんは、そんな空中に浮かんでいた。しかも、背中には鳥のような一対の翼が伸びている。

純白の翼を有するその姿は、まるで古い宗教画などに描かれている天使のようであった。

第6話　元に戻るまでの協力者

唖然としているわたしたちの前に、翼を広げた優子さんが舞い降りる。

『て……、天使？』

元からの美しさも然る事ながら、純白の翼を背負った優子さんはまさに天使であった。その姿を見て、頭に血が上っていた健介ちゃんも冷静になる。それどころか、顔を強張らせながら無意識のうちに後退りしていた。

「言いたいことはよくわかるけど、まずは落ち着いてね～。今から野乃原真菜さんがどうなっているか、ちゃんと説明するから……」

「なっ！　真菜がどうしたって！」

優子さんの言葉を聞き、健介ちゃんの顔色が急変する。健介ちゃんは、屋上に降りて翼の消えた優子さんに詰め寄った。

「だから、落ち着けって言ってるでしょうがっ！」

ずげしっ！　優子さんの拳骨が健介ちゃんの脳天に炸裂する。凄まじい衝撃だったのか、健介ちゃんは両手で頭を抱え――屋上の床に転がりながら悶絶した。

しばらくすると、頭を押さえた健介ちゃんがゆっくりと立ち上がる。相当痛かったのだろう。健介ちゃんは涙目になりながら優子さんを恨めしそうに睨み付けていた。

「こほん……。え～、まずは自己紹介するね～」

何事も無かったかのように説明を始める優子さんに、健介ちゃんは大きなため息を吐く。しかし、優子さんがプラネットメーカーの開発者であること、わたしが魂だけの状態になって別次元に飛ばされてしまったことを聞いているうちに表情は真剣なものとなった。

「信じられないかもしれないけど、真菜は今もここにいるの……」

そう言って、優子さんはすぐ隣り……つまり、わたしの立っている位置に手を向ける。当然、健介ちゃんにはわたしの姿が見えないわけだから、優子さんが指し示す場所は何も無い空間のはずである。案の定、健介ちゃんは呆れたような疑いの眼差しで優子さんをジッと見つめていた。

『あの～……。それを信じろっていうのは、無理があるんじゃないですか？』

「そうね～。真菜、あなたと健介ちゃんだけしか知らない、二人だけの秘密ってないの？」

『秘密ですか～……』

確かにわたしたちしか知らない内容があれば健介ちゃんも信じてくれるかもしれない。わたしは過去の記憶から二人だけの秘密を思い出そうとする。だが、突然発せられた健介ちゃんの怒鳴り声で思考が停止してしまった。

「騙されないぞ！　そんな都合のいいことばかり言いやがって、あんたは真菜のことを――プラネットメーカーで起こった事故の責任逃れをしたいだけなんだろうが！」

「……」

「魂だけ別の次元に飛ばされた？　姿の消えた真菜が今でもすぐ傍

にいる？　ふざけるなよ、オレは絶対におまえを許さねぇ！」

優子さんを指差して、吐き捨てるように叫ぶ健介ちゃん。その態度が気に障ったのだろう、優子さんは額に怒りマークを浮かべて不気味に微笑む。次の瞬間、何も無い空間から宝石のような刀身の美しい大剣を取り出し、その切っ先を健介ちゃんの目前に突きつけた。

「そうね～。あなたが死んで幽霊にでもなれば、わたしの言っていることが本当だってわかってもらえるかしら？」

『ちょーーーっ、優子さん！』

「幽霊になったら、真菜の姿もはっきり見えるようになるかもしれないわよ～。まぁ、真菜は幽霊ってわけじゃないから見えないかもしれないけど……」

真っ青な顔色で脅える健介ちゃん。っていうか、翼があって大剣を持っているなんて、この人本当に何者なのだろうか――

健介ちゃんの様子に満足したのか、優子さんは大剣を消滅させてにっこりと微笑み――手に持っていた携帯端末をわたしに投げてよこした。わたしが触れた途端、健介ちゃんの視界から携帯端末が消えたことだろう。健介ちゃんは、驚いたかのように目を白黒させていた。

「真菜……、試しに健介ちゃんへ通信を入れてみて。別次元でもメールが届いたんだから、通話もできるんじゃない？」

『なるほど……』

わたしはアドレス帳から健介ちゃんを選び呼び出してみるが、携帯端末は何の反応も示さない。

『あっ、今は授業中だから個人通信は使えないんだった～』

学園の備品である携帯端末では、個人目的での通信は遮断されてしまう。まぁ、授業中でも緊急回線なら通話可能だが、後々の面倒な手続きを考えると使用すべきではないだろう。

「学園の端末が無理なら～、これを使ってみて♪」

そう言って、優子さんは白衣の胸ポケットから二枚のカードを取り出した。パッと見た感じはパーソナルカードと同じものであったが、それを受け取った途端、健介ちゃんの瞳に輝きが増した。

「うおっ！　これって――もしかして！」

「そっ♪　この前発表に漕ぎ着けた第十七世代の携帯端末……。今のシステムでは、何をやるのにも外部端末が必要になっていたけど、第十七世代では基本的な機能をこのカード一枚で全て行うことができるようになるの。まぁ、発売は来年ぐらいになると思うけどね～」

「えっ、まさかコレを開発したのって……？」

「ん～？　わたしだけど」

「す、すげぇ～……」

そう、優子さんはプラネットメーカーの開発者というだけではない。表に名前が出ていないだけで、ハイテク関連事業の様々な製品開発に携わっているのだという。中でも、プラネットメーカーのように現在のテクノロジーでも詳細がわからないような製品や機器のほとんどを、優子さんが中心となって開発しているらしい。この次世代パーソナルカードも、そのうちの一つのようだ。

「じゃあ、最初にパーソナルカードの情報を移すから、携帯端末の

拡張スロットにそのカードを差し込んでみて」

言われるがままカードを差し込むと、僅か数秒でデータの移動が完了する。

「これからは、そのカード端末があなたたちのパーソナルカードになるから……。で～、現行のシステムを利用するときには、今までと同じようにスロットへカード端末を差し込む。携帯端末で使っていた機能は、カード端末だけでできるようになったから。まず、カード端末を取り出して、金属端子部分を挟み込むように親指で押さえてみて」

説明通りにしてみると、カードの表面に半透明のモニターが浮かび上がる。だが、肝心の操作系パネルはどこにも現われない。

「カード端末の操作は、頭で考えたことを親指で触れている端子が読み取る仕組みになっているの。慣れるまでは、頭の中で『なにに起動』とか、実際に考えるようにすればいいから♪」

『え～っと……』

わたしは、悪戦苦闘しながらアドレス帳を呼び出す。慣れてしまえば軽く思うだけでそれぞれの操作もできてしまうようだが、しばらくはこんな状態が続くことになるだろう。

なんとか健介ちゃんのアドレスを選択して通話をイメージする。すると、すぐ近くで着信音が鳴り響く。どうやら無事に健介ちゃんへの通信が繋がったようだ。

「えっ！」

タイミング良く着信音が鳴ったため健介ちゃんは驚きの声を上げ

る。操作法に苦労しながらも、リアルタイムのコミュニケーションツールを起動させた。そして、モニターにわたしの顔が映し出された瞬間、信じられないといった表情で呟いた。

「……、嘘――だろ？」

『あははっ……。健介ちゃん、おはよ～』

苦笑しながら挨拶すると、健介ちゃんの瞳から大粒の涙が溢れ出す。

『えっ、ちょっ、健介ちゃん！　なに泣いてるのよ～！』

「だって――真菜……」

わたしは健介ちゃんが見せた涙にあたふたしてしまう。泣いている健介ちゃんなんて、なんだか久しぶりに見た気がした。

「ねぇ～♪　真菜は、ちゃんとここにいるでしょ～」

「あ……がっ？」

突然、優子さんがわたしの背後から通話の映像に割り込む。わたしと同時に映っている優子さんを見て、健介ちゃんは愕然としてしまったようである。手元の映像とわたしたちが立っている位置を交互に確認して、口をパクパクさせていた。

「真菜……。おまえ、本当にいるのか？」

『うん。朝起きたらこんな状態になっていたけど、ちゃんと健介ちゃんの目の前にいるよ……』

健介ちゃんは目を丸くして驚いている。意識不明の重体で入院しているはずのわたしと会話しているのだから、当然の反応だといえ

るかもしれない。
わたしは、モニターに釘付けとなっている健介ちゃんに視線を向ける。すぐ傍にいるのにカード端末で通話しているなんて、なんだかとても間抜けな感じがしてしまうのだった。

「これで、わたしが危ない電波さんじゃないってわかってくれたわね♪」
「ああ……。だけど、真菜のことを何とかしない限り、あんたはオレの敵だ……」
「この～っ、憎たらしい子ね～！」

優子さんは、脇に健介ちゃんの頭を抱え――拳を脳天に押し付ける。口元が緩んでいるところを見ると、さきほどと違って怒っているわけではなさそうだ。むしろ、健介ちゃんとの遣り取りを楽しんでいるかのようであった。

『あの……、優子さん？』
「ん～？」
『電波とかはいいんですが……、優子さんに生えていた翼の方は～？』

健介ちゃんとの一件で有耶無耶になってしまったが、わたしは優子さんの背中に生えていた翼のことがかなり気になっていた。あのような立派な翼、服の中にも隠しておけないはずである。それなのに、今では翼の存在など見る影もなかった。
「あ～、その話しは置いといて～。健介ちゃん、ちょっといい？」
話題を変えるように、優子さんは健介ちゃんに声をかける。

「ちっ……、その呼び方はやめろよ鳥人間――」
「ふふ～ん、そんな口の利き方をしていいのかな～？　これから健介ちゃんは、わたしに感謝することになるんだけど～」
「はぁ～？　何言ってるんだよおまえ……」
「真菜もちゃんと聞いて……。わたしはこれから事故を起こしたプラネットメーカーの解析にかかりっきりにならないといけないの」
「さっさと原因を突き止めて、真菜を元に戻せよ……」
「黙って聞きなさい！　え～、まぁ言われなくても早急に原因を突き止めるつもりだけど、それまでの間――真菜の魂が身体に戻れるまで、誰かが彼女を助けてあげなくてはいけないの♪」
『……えっ？』
「なにが言いたいんだ？」
「つまり～、今の真菜は魂の存在だとはいえ普通の人間と変わらない。別次元にいたとしても、生きていくためには今まで通りの生活をしなくてはならないのよ」
『なるほど、だから協力者……』
「……？」
「健介ちゃん、真菜が元に戻れるまでの間、あなたが彼女の面倒を見てあげてね♪」
「は、はぁあああーーー！」

北校舎の屋上に健介ちゃんの絶叫が響き、人とは思えない……映像が駒落ちするようなカクカクした動きで優子さんを見つめた。
「ほら、こういった超常現象に巻き込まれた場合、当事者のことをよく理解している協力者が必要なの。それに、こんな姿で自分の家に戻っても、ご家族が混乱して哀しむだけだから……」
真顔でもっともらしいことを呟く優子さんに健介ちゃんは唖然と

してしまう。確かにこんな状態では、家に帰ってもお母さんを混乱させるだけである。少し心配させることになるが、今のまま入院していることにしておいて、健介ちゃんに協力してもらった方がいいかもしれない。

「ちょっ！　真菜の面倒を――オレが！」
「真菜も、しばらくは健介ちゃんの家……っていうか、彼の部屋で寝泊まりしてね」
『健介ちゃんの部屋にお泊まりか～。なんだか久しぶりだね～♪』
「って、真菜はそれで良いのかよ！」
『え？　何が～？』
「……」

もしかして健介ちゃんにしてみれば迷惑なのだろうか――
わたしは、自分のことしか考えていなかったと反省する。このような似非幽霊状態では、健介ちゃんに迷惑をかけない方がおかしい。健介ちゃんにしてみれば、余計な手間がかかるだけで、何のメリットも無いはずだ。しかも、健介ちゃん自身の貴重な時間を消費させてしまうことになる。

『ご、ごめんなさい健介ちゃん……。健介ちゃんが嫌なら――わたし……』
「だ、誰が嫌だって！」
『えっ、健介ちゃん？』

てっきり嫌がっているものだと思っていたがどうやらそうではなさそうである。その瞬間、優子さんが人知れずニヤリと微笑んだ。

「それじゃあ、協力者は健介ちゃんに決定ということで～」
「お、おい！」

「あぁ～、それと……。真菜が元に戻るまで、このことは健介ちゃんだけの秘密にしておくこと♪」
「まぁ～、昴先輩たちに知らせても、心配させるだけだしな～……」

そんな感じで、わたしのことはアストロクリエイター部のみんなにも秘密にすることになった。健介ちゃんの言うように、元に戻れる保証の無いまま知らせても、神倉先輩たちを心配させるだけだ。知らせるにしても、もう少し後でも遅くはないだろう。

「それはそうと～、健介ちゃん健介ちゃん？」
「あ～？」

不意に優子さんが真剣な表情で健介ちゃんを見つめる。
何か重要なことを伝えようとしているのだろうか――しばらく無言の状態が続く。そして、覚悟を決めたかのように、人差し指を立てながら囁くように呟いた。

「どう……、感謝した？」
「や、やかましぃーーーーー！」

再び北校舎の屋上に健介ちゃんの絶叫が響く……。わたしは、微妙に意味がわからず、苦笑しながら小首を傾げるしかなかった。

第7話　夏合宿へのお誘い

プラネットメーカーの開発者である優子さんが原因の解明を約束してくれて、健介ちゃんという協力者も決まった。後は時空のズレを何とかして入院中の身体に戻るだけ……のはずだったのだが、実はもう一つ大きな問題が残っていた。

それは、今回の事故によって禁止されてしまったアストロクリエイター部の活動のことであった。

『あっ、優子さん……。学園のプラネットメーカーって、どれぐらいで使えるようになりますか？』

「あなたたち、プラネットコンテストに――出るつもりなの？」

「当たり前だろ！　オレたちアストロクリエイター部は、そのために活動を続けてきたんだから」

「う～ん……、でも今回の事故のことは、簡単に原因がわかる問題じゃないと思うのよ。ある程度の状況が把握できるまで、プラネットメーカーは現状維持のまま保管しておかなくてはならないの。修理するのはその後ということに……。完全に使えるようになるには少なくとも一ヶ月――いいえ、二ヶ月はかかるんじゃないかな～」

『そんなに――』

「けっ、役に立たねぇ鳥だな……おい」

「あ～ら、健介ちゃん……。本格的にお姉さんと遊んでみる～？」

「痛い痛い！　ま、まぁ～、プラネットメーカーが直ったとしても、部活は禁止されているわけだし。どっちにしても、今年のプラネットコンテストは見送りだろうな……って、いい加減放しやがれ！」

『そ、そんな～……』

健介ちゃんの言葉は、わたしをさらに落ち込ませた。

アストロクリエイター部の活動は、事後の原因が解明されて、プ

ラネットメーカーの安全が保証されるまで禁止となっている。代替えのプラネットメーカーがあったとしても、部活が禁止されていては新たな惑星創りを始められない。また、調査に二ヶ月もかかっていては、必然的にプラネットコンテストは終わってしまうことになる。やはり、惑星創造は諦めるしかないのだろうか――

「それなら、学園の部活じゃなかったら良いんじゃない？」
『え？　それってどういう……』
「メンバーが個人的に集まって、別のプラネットメーカーを使えば誰にも文句は言えないでしょ♪」

そう言って、優子さんは紙のメモ帳に何かを書き始める。今時、紙とペンを持ち歩いているなんて、優子さんは意外にアナログ的な人であった。

「この住所に、わたしが使っていたプラネットメーカーがあるから、コンテストに出場しようと考えているなら挑戦してみることね～」
『お借りしても……いいんですか？』
「なんだったら、夏休みに集まって合宿みたいなことをしてみる？けっこう大きな家だから、十数人ぐらいなら問題ないと思うよ」

優子さんの提案は、今のわたしたちにとってとても魅力的なものだった。夏休みに合宿など、みんなの都合がつくなら、もの凄く楽しそうである。

「もし挑戦する気があるなら、その前に一度連絡を頂戴ね。壊れたプラネットメーカーから基本ＯＳをそっちに移しておくから。……とは言っても、あと一回分しかシミュレート数が残ってなかったみたいだけど」
「って、そんなことが――できるのか！」

「ふっふ～ん。システム開発者をなめないでよね♪」

にんまりと微笑む優子さん。この先どうなるかはわからなかったが、合宿することになった場合のため一応お願いしておいた――

「じゃあ、わたしは事故現場に戻るけど、あなたたちは？」

「オレも授業に戻るかな……。真菜はどうする？」

『わたしは……、授業が終わるまでここにいるね……』

教室に戻ったとしても、自分の個人システムを立ち上げない限り、授業を受けることはできない。また、優子さんに着いていったところで調査の邪魔になるだけだろう。

もちろん、手元にパーソナルカードがあるため、一応は個人システムを起動させることもできる。だが、誰もいないのにシステムだけが動いていたらそれこそ心霊現象で大騒ぎになってしまう。健介ちゃんも、そのことを察してくれたようである。

「そうか……。じゃあ、放課後迎えにくるな……」

健介ちゃんは、モニターに映っている景色を頼りに、わたしが立っているであろう空間を見つめる。そして、名残惜しそうな表情をしながらコミュニケーションツールを終了させた。

今のわたしたちの関係は、事故の原因が解明するまで周りの人には内緒である。例えカード端末経由とはいえ、いつまでも通話しているわけにはいかなかった。

「それじゃあ真菜、何かあったらすぐに連絡するのよ」

わたしは、優子さんの言葉にコクリと頷く。

屋内へ戻っていく優子さんと健介ちゃんの姿が見えなくなったと

き、胸をキュ～ッと締め付けられるような淋しさに襲われるのだった。

学園へ来ているのに何もすることがないというのは退屈そのものである。わたしは、放課後になるまでの間、カード端末でプラネットメーカーの事故について様々な情報を集めていた。

絶対に安全と思われていたプラネットメーカーが暴走したことは、かなりインパクトのある出来事だったようで、お昼のワイドショーなどでも大きく取り上げられていた。

このまま暴走の原因がわからなければ、久しぶりにこの国で開催されるプラネットコンテストが中止になるかもしれない。番組ではそんなことを危惧していた。しかし、どういうわけだか放課後になる頃にはそんな騒ぎも下火となっていた。

普通なら、事故があったこの学園に報道関係者が押し寄せてきてもおかしくないはずである。それなのに、校門前には放送局どころか、雑誌記者の姿すら見当たらない。まるで、何らかの圧力によって、報道規制がされてしまったかのようであった。

そして……、時は流れてその日の放課後――

北校舎の屋上には、部長である神倉先輩の呼びかけによって、アストロクリエイター部のメンバーが集まっていた。

アストロクリエイター部に所属している部員数は総勢五名……。高等部二年で部長の神倉昴先輩。同じく二年で副部長の夏樹若葉先輩。高等部一年の遠野健介ちゃん。唯一の中等部、二年の鷲崎瑞希。最後に高等部一年のわたし、野乃原真菜であった。

「マナ先輩のお見舞いに行きましょう！」

いきなり瑞希が大きな声で叫ぶ。だが、神倉先輩が瑞希の意見を制するように呟いた。

「いや、事故が起きて間もないわけだし、お見舞いに行くのは少し期間を置いてからのほうがいいと思う……」
「そうね～、昨日の今日でお見舞いに行っても付き添っているご家族の方が迷惑するだけでしょうし、昴の言うようにもうしばらく様子を見たほうがいいでしょうね」
「それに、おそらく病院には事故のことを取材する報道関係者が集まっているはず……。そんなところにボクたちが出向いたら、騒ぎを大きくしてしまうだけなんじゃないかな？」
「そ、そんな～……」

神倉先輩と若葉さんの否定的な意見に瑞希は愕然としてしまう。瑞希にしてみれば、今すぐにでもお見舞いに行きたいのだろう。まぁ、入院しているはずの当の本人は、似非幽霊状態ですぐ近くにいるわけなのだが――

「健介は……、健介はマナ先輩に会いたいよね！」

わたしと仲の良い健介ちゃんなら必ず同意してくれる。瑞希は、縋るような想いで健介ちゃんに問いかけた。そんな瑞希の様子に、健介ちゃんは困ったように頭を掻く。

「まぁ～、オレたちがお見舞いに行ったからって、真菜が回復するわけじゃない……。だったらお見舞いはもう少し後でもいいんじゃないか～？」
「健介……。あんた――何言って……」

その言葉を聞いて、瑞希は信じられないといった表情で愕然とする。わたしの本当の状態を知っている健介ちゃんと、意識不明の重体で入院していると思っている瑞希では、その必死さがかなり違う

のだろう。何も知らない瑞希にとって、健介ちゃんの言葉はかなりショックだったようだ。

「あんた、それでもマナ先輩の……」

悔しそうに唇を噛み締めた瑞希は、ついに泣き出してしまった。

突然のことに、神倉先輩と健介ちゃんは慌ててしまう。すると、泣きじゃくる瑞希を、若葉さんが優しく抱きしめた。そんな光景を……わたしは他人事のように眺めていた。

瑞希がわたしのために泣いてくれているのは理解できる。でも、こうして自由に動き回れることを考えると、本当のわたしが入院していることの方が信じられなかった。

思い切ってみんなにもわたしの存在を伝えてしまいたい――とも考えたが、事情を話したところで混乱させてしまうだけであろう。瑞希のことは若葉さんに任せて、ここは黙って成り行きを見守るしかなかった。

「それじゃあ、今度の土曜日に野乃原さんのお見舞いへ行くことにしようか」

神倉先輩は、瑞希の涙に苦笑しながらそんなことを切り出した。

その頃であれば、付き添っている家族も落ち着いているだろうと考えられる。そのため、誰からも反対意見は上がってこなかった。

「用事のある人もいるだろうけど、なるべくこちらを優先させてほしい」

みんなが頷くのを見て、神倉先輩は満足そうに微笑む。

「あと、これからは何かあればメールで連絡を取り合うことにしよう。部活が禁止されてしまったから、みんなで集まることも少なくなるだろうし……」

その話を聞いて、わたしはあることを思い出した。優子さんに提案された夏合宿のことである。

部活が禁止されていたとしても、メンバーが個人的に集まって学園と別のプラネットメーカーを使えば問題は無い……。なかなか強引な解釈ではあるが、そうでもしない限り事故の調査が終るまで活動を再開できない。プラネットコンテストへの参加締切りも迫っているこの時期に、そんな悠長なことを言っている場合ではなかった。

とはいえ、意識不明で入院しているはずのわたしが夏合宿を提案できるはずもない。わたしは、優子さんから貰ったカード端末を取り出し、健介ちゃんに向けてメールを送ることにした。

メーラーを起動させて、頭の中で文章を組み立てる。すると、モニターには考えた通りの文字が現われた。

『おぉ～♪』

わたしは、おもわず声を上げてしまう……。次世代の情報端末がこれほど便利なものだとは驚きであった。

『っと、いけない……』

カード端末の便利さに感心している場合ではなかった。早くしないと、用事の済んだみんなが帰ってしまうかもしれない。わたしは、出来上がった文字メールを、急いで健介ちゃんのカード端末に送信した。

「……ん？」

着信に気づいた健介ちゃんは、ポケットからカード端末を取り出す。他のみんなに感づかれないよう、後ろ向きでメール内容を確認した。

もちろん、集まっているのは小数であるため、その行動に誰も気づかないはずがない。というより、他の全員が健介ちゃんの奇妙な行動を注目していた。

メールを読み終えた健介ちゃんは、自分が注目されていることに気づいて慌ててしまう。だが、なんとか平静を装って、わたしからのメールの内容――アストロクリエイター部の夏合宿について提案をはじめた。

「あ～、部長……。今年のプラネットコンテストは、もう諦めてしまうんですか？」

「諦める……というより、部活が禁止されているからな～。それにプラネットメーカーも壊れてしまったし、どうすることもできないだろ？」

「いや、実はある場所のプラネットメーカーを借りられそうなんですよ……」

それを聞いた瞬間、神倉先輩の表情がパッと明るくなる。しかし、すぐにその感情を押し殺すように、目を伏せてしまった。

「たとえ代わりのプラネットメーカーがあったとしても、活動は自粛しなければならない。開発者の人は、ボクたちに責任は無いって言ってくれたけど、野乃原さんの事故はアストロクリエイター部に無関係なことじゃないんだから……」

神倉先輩は、まるで自分に言い聞かせるかのように呟く。その真剣な表情に、健介ちゃんは言葉を詰まらせてしまった。

なんともいえない気まずい空気が流れる。そんな沈黙を破ったのは、二人の遣り取りを静かに聞いていた瑞希であった。

「でも……、コンテストを諦めたって聞いたら、マナ先輩がっかりするんじゃないかな～」

しっかりとした視線で、瑞希はみんなを見回す。

「それに、自分が原因でコンテストがダメになったって知ったら、マナ先輩、絶対に悲しむよ！」

瑞希は、大きな声で神倉先輩に訴えかけた。

それを受けて、神倉先輩は両腕を組むように考え込む。考えが纏らないのか、意見を求めるかのように――若葉さんへ視線を向けた。

「確かに、コンテスト出場を一番楽しみにしていたのは、真菜ちゃんだったわね～」

ふと、若葉さんの言葉に違和感を覚える。わたしは、そんなにプラネットコンテスト出場を楽しみにしていたのだろうか……。

もちろん、アストロクリエイター部の目標は、惑星を創造してプラネットコンテストに出場することである。ただ、わたしが一番楽しみにしていたかというと、そうではないように思えた。

コンテスト出場を一番楽しみにしていたのは、間違いなく神倉先輩である。わたしは、惑星を誕生させようと一生懸命だった神倉先輩につられてはしゃいでいただけなのだから。

「部長！　やっぱり真菜のためにも諦めちゃダメですよ！」

健介ちゃんは、ここぞとばかりに神倉先輩を畳み掛けようとする。

「そこには泊めてもらえる施設もあるらしいんです。だから夏休みに入ったら泊り込んで、コンテストまでに惑星を創りましょう！」
「野乃原さんの……ために――」

神倉先輩は再び考え込んでしまう。先輩の気持ちは、かなり揺れ動いているようであった。
しばらくすると、神倉先輩がゆっくりと顔を上げる。健介ちゃんたちを見回すようにして、先輩なりの考えを伝えた。
「この問題は簡単に決めるべき内容じゃない。結論を出すにしても、もう少し時間が必要だと思う」

続いて、神倉先輩の説明を補うように若葉さんが発言する。
「幸い夏休みまであと一週間あります。この話は、真菜ちゃんのお見舞いに行ってから決めることにしましょう」

若葉さんの意見に、全員が大きく頷いた。

夏合宿の話もなんとか纏り、アストロクリエイター部の臨時会議はお開きとなった。
先輩たちは一足先に帰ってしまい、屋上には健介ちゃんと瑞希だけが残される。まぁ、正確には姿の見えないわたしもいるわけだが――
瑞希はなぜか健介ちゃんをジッと睨みつけている。その態度にうんざりしながらも、健介ちゃんは瑞希と向かい合う。いつも思うことだが、二人はどうしてこんなに仲が悪いのだろう。

「……なんだ？　何か言いたいことでもあるのか？」

瑞希が健介ちゃんに突っかかってくるのは今に始まったことではない。健介ちゃんも瑞希が自分を嫌っているのだと、なんとなく気づいているのではないだろうか。威嚇するような雰囲気の瑞希を見て、健介ちゃんは大きなため息を吐いた。

「……」

健介ちゃんの問いかけにも瑞希はまったく答えようとしない。それどころか、さらに目を吊り上げるようにして健介ちゃんを睨みつけた。

「何も無いんなら、帰るからな！」

その態度にイラついたのか、健介ちゃんは吐き捨てるような言葉を残して階段へ向おうとする。その瞬間、瑞希が健介ちゃんの袖をギュッと掴んだ。

「……あ」

自分自身が仕出かしたことに驚いたような表情をする瑞希……。その予想外の行動に、健介ちゃんも目を丸くして振り返る。健介ちゃんにジッと見つめられ、どういうわけか瑞希の顔は耳まで真っ赤に染まっていた。

「み……ずき？」

「あっ、その、え～っと……」

言いにくいことなのか、瑞希は口篭るように下を向く。健介ちゃ

んが唖然としていると、覚悟を決めた瑞希は――顔を上げて大きく叫んだ。

「合宿の話……、ありがとう！」

その途端、瑞希の顔がさらに赤く染まる。そして、健介ちゃんから逃げるように階段を駆け下りていってしまった。

「な、なんだったんだ……？」

あまりのことに呆然と立ち尽くす健介ちゃん。わたしも、瑞希の見せた反応に驚いてしまう。さきほどの瑞希は、これまで見られなかった反応をしていた。

第8話　つかのまの平穏

自宅への帰り道……。わたしと健介ちゃんは、お互いのカード端末で通話をしながら歩いていた。

歩きながらの端末操作は危険だとわかっているが、こうでもしない限り健介ちゃんが別次元に飛ばされたわたしとコミュニケーションする方法はない。自宅に戻ってから思う存分通話すれば良いとも考えたが、それだと帰り道がなんとも味気ないものになってしまう。まぁ、通話といっても、それほど実のある内容ではないのだが――

「なぁ真菜……。おまえ、本当にオレの部屋で……、その～泊まるつもりなのか？」

突然、健介ちゃんがそんな話題をふってくる。午前中に決めたことを蒸し返すなんて、やはり健介ちゃんにしてみれば迷惑なのだろうか。わたしは、そっと隣に立つ健介の様子を窺ってみる。なにやら複雑そうな表情をしているが、嫌がっているようには見えない。

『うん。健介ちゃんが嫌じゃなければ――だけど。それに、他の人ならともかく、健介ちゃんには気を遣わなくてもすみそうだし』

そう答えると、健介ちゃんは泣きそうな顔で項垂れてしまう。なにをそんなに落ち込んでいるのだろう。わたしは、意味もわからずに小首を傾げてしまった。

しばらくそんな感じで喋っていると、いつの間にかわたしの家が近づいていた。

『あ……、家から着替えとかを持ってくるから、健介ちゃんはちょっと待っててね～』

わたしは、健介ちゃんの返事も聞かずに走り出す。健介ちゃんの部屋に泊めてもらうにしても、最低限の準備は必要だろう。

玄関に手をかけると、当然ではあるがしっかりと錠がかかっていた。どうやらお母さんは、まだ病院から戻ってきていないようである。おそらく、入院しているわたしの身体に付き添っていて、しばらく帰ってこないのだろう。わたしは、カード端末をセンサーに翳して、扉のロックを解除した。

階段を上がり、自分の部屋に辿り着く。着替えなどを大きめのショルダーバッグに入れて、何気なく部屋の中を見回してみた。

慣れ親しんだ自分の部屋……。特別な事情があるとはいえ、まさかこの部屋から出て行くことになろうとは夢にも思わなかった。

いったいどれだけこの部屋を空けておかなくてはならないのだろう。このまま元に戻れず二度と帰って来られないのではないだろうか――そんな考えが脳裏に浮かび、わたしはガタガタと震えてしまう。もし優子さんが時空のズレを修復する方法を見つけられなければ……、そうなる可能性は充分に考えられた。

『ダメダメ！』

不安を拭い去るように、わたしは頭を左右に振る。この先どうなるかわからないし、いま考えても仕方のないことだ。

『さてと、健介ちゃんが待っているだろうし、急がなくっちゃ……』

そっと部屋を出たわたしは、辺りを見回しながら……家の中の光景を脳裏に焼き付ける。この光景を見るのが、最後にならないことを祈って――

玄関まで戻ると、健介ちゃんが所在無さそうに立ち尽くしていた。わたしはカード端末を取り出し、目の前の健介ちゃんに通信を入れ

る。
　モニターに映った健介ちゃんは、どこか複雑そうな表情をしていた。通信越しでしか会話のできないわたしを哀れんでいるのかもしれない。わたしは、どう反応していいのかわからず、苦笑するしかなかった。

　プラネットメーカーの暴走という信じられない事故が起こったにも関わらず、夜の番組でも簡単なニュースが流れるだけで、詳細などは一切報道されることがなかった。
　学園でニュースをチェックしていたときからおかしいと感じていたが、ここまで少ないことを考えると本当に報道規制がかけられているのかもしれない。普通なら、予定されていた番組がキャンセルになって、特別番組が放送されていたとしてもおかしくないからだ。まぁ、特別番組などちょっと大げさかもしれないが、わたしにしてみればそれほど大きな問題であった。
　もしかすると、優子さんが何らかの根回しをしてくれているのかもしれない。詳しい情報がわかるとはいえ、悲惨な事故のニュースを聞かされたりしたら気分が滅入ってしまうからだ。
　そのとき、部屋の扉が開いて、お盆に二人分の食事をのせた健介ちゃんが入ってきた。

「うぅ～……。部屋で二人分食べるって言ったら変な顔された～……」

　健介ちゃんが言っているのは、おそらく遠野のおばさんと妹の七海ちゃんのことである。
　お盆をテーブルに置いた健介ちゃんは、急いで部屋の鍵を閉める。健介ちゃんの奇行を怪しんだ家族が、突然乱入してくるのを防ぐためであった。

わたしの姿や声は、優子さん以外には判別できない。そのため、似非幽霊状態のわたしとコミュニケーションを取るには、常に端末の回線を開いておいておくしかない。つまり、傍から見れば、健介ちゃんは誰かと通話しながら一人で食事している寂しい状態なのである。そんな姿を、家族に見せるわけにはいかないだろう。もちろん、こんな状態のわたしが――健介ちゃんの部屋に泊まりこんでいることを知られないための意味合いが強いわけだが……。

『健介ちゃん、ごめんね～。なんちゃって幽霊状態でも、お腹は減っちゃうみたいだから……』

「はぁ～……。協力者が必要って意味、はじめてわかった気がするよ～」

運ばれてきた料理のいい香りにお腹がグゥと鳴る。わたしは、恥ずかしさのあまり、苦笑しながらお腹をさすった。

魂の状態といっても、肉体が無いだけで本当に普通の人間と変わりないようである。お腹は減るし睡眠も必要となるはずだ。お母さんはしばらく家に戻ってこないだろうし、優子さんの言うように協力者がいなければ途方に暮れていたことだろう。

ちなみに、いまは学園配給の携帯端末に優子さんから貰ったカード端末を差し込んで通信している。カード端末は考えられないほど高性能だが、通話するためには親指で金属端子を押さえておかなければならない。食事をしながら……となると、テーブルに置いた状態で通話できる携帯端末の方が便利だからだ。

『健介ちゃん、ありがとね……』

わたしは、健介ちゃんをジッと見つめて、あらためて感謝の言葉を伝えた。すると、健介ちゃんは照れたようにそっぽを向く。

「まぁ、なんだ～。冷めないうちに食っちまおうぜ」

クッションに腰を下ろした健介ちゃんは黙々と食べ始める。わたしは、作ってくれた遠野のおばさんに感謝しながら、美味しそうな料理をいただくことにした。

夕食後……。わたしと健介ちゃんは、特に何をするわけでもなく、点けっぱなしになっているテレビ画面を眺めていた。

この時間になると、事故のニュースは全く放送されなくなっていた。ここまで無反応だと、昨日の事故自体が夢だったような気さえしてくる。もちろん、自分に起こっている現状のことを考えると、夢であるはずもないのだが――

「ん～……、ごほごほっ！」

突然、健介ちゃんが空咳をする。健介ちゃんは、どこか落ち着かない様子でソワソワしていた。なんともいえない空気が辺りに漂い、それに耐えられなくなった健介ちゃんがゆっくりと立ち上がった。

『……。……健介ちゃん？』

「あ～、ちょっとトイレ！」

そう言い残して、健介ちゃんは部屋を出て行ってしまう。この一時間で、いったい何回トイレに行くのだろう……。

『あっ、そうだ♪』

わたしは、ショルダーバッグを開けて、替えの下着やバスタオルを取り出す。部屋を出る前に、トイレへ行った健介ちゃんに向けて

映像メールを録画した。

『先にお風呂を使わせてもらうね～♪』

ちゃんと映像メールが送信されたのを確認してから、わたしはお風呂場へと向うことにした。

健介ちゃん家のお風呂は、階段を下りた一階の奥にある。わたしは、誰も入っていないことを確認して、脱衣所で服を脱ぎ――急いで浴室へと入った。

シャワーで汗を流して少し熱めの湯船に浸かる。

『う～～～ん、気持ちいい～♪』

湯船で手足を伸ばすと、心地良い温かさが全身に伝わった。日差しは暑くなかったというのに、直接触れているお湯は温かく感じられる。いまいち法則性がわからないものである。

なんにしても、これで魂だけの存在だというのだから信じられないものがあった。そんなことを考えていると、脱衣所に誰かが入ってきたのを感じた。

『って、まずっ！』

突然のことにわたしは焦ってしまう。なんとか隠れようと顎までお湯に浸かるが――そんなことで姿が消えるはずもない。そ～っと曇りガラスに視線を向けてみると、何者かは鼻歌交じりに服を脱いでいるところのようだった。

「おっふろ～♪」

扉を開けて入ってきたのは、わたしより二歳年下で健介ちゃんの

妹、遠野七海ちゃんであった。
バスチェアに腰を下ろした七海ちゃんは、やはり鼻歌交じりにシャワーを浴びている。どうやら、完全にわたしの存在には気づいていないようであった。
よくよく考えてみれば当然のことである。今のわたしは、魂が別次元に飛ばされている状態で、優子さん以外には姿を確認することすらできない。七海ちゃんが気づく要素はどこにもなかった。
しかし、姿は見えないとしても、湯船の中はどうなのだろうか……。わたしの身体が浸かっている箇所には、当然ではあるがお湯は存在していない。もしかすると七海ちゃんの瞳には、わたしの身体の形にお湯が無いように映ってしまうかもしれない。そうなれば――まるで怪奇現象であろう。
気づかれる前に何とかしなければいけない。そんなことを考えていると、シャワーを浴び終えた七海ちゃんがこちらに近づいてきた。
七海ちゃんは、湯船のふちに手を置き、中に入ろうと片足を上げ……何事もなかったかのようにお湯へと入ってきた。

「ふぅ～～～っ、極楽～♪」

湯船に浸かった七海ちゃんはその気持ちよさにうっとりする。
時空のズレの影響からか、どうやら元の空間では、わたしの浸かっている場所にもお湯があるように見えているようである。いったいどうなっているのだろうか……。とにかく、七海ちゃんを無意味に恐がらせることがなく、わたしはホッと息を吐いた。
すると、再び脱衣所に何者かの気配を感じた。気配の主はよほど慌てているのか、曇りガラス越しに声をかけることもなく、勢いよく浴室の扉を開け放つ。
それは、わたしの残した映像メールを見てすっ飛んできた健介ちゃんであった。

『あ……』
「てめぇ！　勝手に風呂に入るって、いったい何を考えてやがるんだーーー！」

わたしがお風呂に入っているとわかっていて飛び込んできたのだ。健介ちゃんも、かなり焦っていたのだろう。
だが、魂だけが別次元に飛ばされたわたしの姿は、健介ちゃんに見ることはできない。健介ちゃんに見ることができるのは、湯船の中で唖然としている七海ちゃんの姿だけであった。
かわいそうに、七海ちゃんはわけもわからずに固まっている。
逸早く状況に気づいた健介ちゃんは、慌てて浴室の扉を閉める。
その瞬間、遠野家を中心に七海ちゃんの悲鳴が響き渡った。

「きゃあああーーーーー！　健兄ぃのスケベ！　変態ぃ～、一回死ねぇえええーーーーー！」

涙目になりながら七海ちゃんは叫び声を上げる。今回の一件で、健介ちゃんには妹の入浴を覗いたという不名誉なレッテルが貼られてしまった。

『健介ちゃん……。ほんと、ごめん……』

わたしは、苦笑気味に呟く。また、お湯越しに裸を見られた七海ちゃんにも、心の中でお詫びを入れておいた。
そんなこんなで、わたしと健介ちゃんとの生活は、どたばたしながらも楽しく続いていく。
そして、あっという間に時は流れ、アストロクリエイター部のみんなが入院しているわたしのお見舞いに行く週末となった。

第9話　確実に存在している繋がり

土曜日の午後、アストロクリエイター部のみんなは、駅前の公園に集まっていた。プラネットメーカーの暴走に巻き込まれて入院している部員の一人……つまり、わたしのお見舞いに行くためである。

わたしは未だ昏睡状態にあり、その原因すら判明していないという。それもそのはず。わたしは、魂だけの状態で別次元に飛ばされてしまい、肉体に戻ることができなくなっているからだ。しかも、その魂は病院ではなく、ここ数日は健介ちゃんの部屋で生活をしていた。魂が無い状態で、入院している方のわたしが意識を取り戻すはずなど絶対にないのである。

「そろそろ行こうか……」

全員揃ったのを確認して、神倉先輩が号令をかける。まさか姿の見えないわたしがすぐ近くにいるなど、健介ちゃんを除いたみんなは夢にも思わないだろう。

『はぁ～……、それにしても……』

今更ではあるが、自分自身のお見舞いに行くなど、かなり間抜けな気がする。わたしは複雑な心境となって項垂れてしまった。

事情を知っている健介ちゃんは、一緒に行かない方がいいと言ってくれていた。でも、自分の身体の様子を把握しておくことは、これからどうするかを決めるためにも必要となってくる。いつまでも、こんな似非幽霊状態でいることなんてできないのだから――

わたしが入院しているという病院は、駅から歩いて二十分ほどのところにある。魂が別次元に飛ばされるという特殊な事故に巻き込まれてしまったわけだから、そういった専門の治療機関に入院して

いるかと思っていたが普通の総合病院であったようだ。

「みんな、ちょっと待って……」

病院近くまでやってくると、突然、神倉先輩が隠れるように指示を出す。

いったい何事だろうか。その言動を不思議に思っていると、神倉先輩は近くの物陰から病院の様子を窺うように覗き見た。どうやら、事故のことを取材に来ているマスコミがいないか確認しているようだった。

「よし……。大丈夫みたいだ……」

神倉先輩は安心したようにホッと息を吐く。マスコミにしてみれば、わたしたちアストロクリエイター部の部員は恰好の取材対象である。見つかってしまえば、大騒ぎとなることは目に見えて明らかであろう。用心することに越したことはない。

とはいえ、事故に関しては相変わらず報道規制でもかかっているかのような状況であった。また、アストロクリエイター部に対しても、必ず何らかの取材があると考えていたのだが――それもなかった。ほんと、どうなっているのだろう……。

何にしても、意味もなく騒ぎ立てられることがないのはありがたいことであった。

安全を確認したわたしたちは、神倉先輩を先頭に病院へと入る。

病院特有の雰囲気に戸惑いながらも受付まで辿り着き、設置されている端末にパーソナルカードを通して、個人照明と面会の手続きを行う。その後、少しだけ迷いながらもわたしが入院している病棟までやって来た。

「野乃原真菜……。ここだな……」

壁のネームプレートを見て病室を探し当てる。さすがに一般病室ではなく個室に入れられているようであった。

「失礼します……」

神倉先輩がドアを軽くノックして病室に入っていく。わたしたちも――その後に続いた。

通路の奥へ進むとかなり広い部屋に出た。その中央にベッドが置かれており、一人の少女が寝かされている。ベッドの周りには様々な機械が並べられており、それらから伸びた幾つものケーブルが少女と繋がっていた。おそらく、少女の容体をモニターしている装置なのだろう。

「あ……、健介くん……」

呆然と立ち尽くしているわたしたちに気づいたのか、ベッドの近くに座っていた女性が声をかけてきた。それは、看病疲れで少しやつれた感のあるお母さんであった。

「お見舞いに来てくれたのね、ありがとう……」

お母さんはゆっくりと立ち上がり、わたしたちに近づいてくる。

「おばさん……」

顔色の悪いお母さんを見て、健介ちゃんが心配そうに呟く。その瞬間、お母さんの手刀が健介ちゃんの脳天にヒットした。

「だぁあああ！」

「麻衣さんでしょ、健介くん♪」

お母さんは、両手で頭を押さえて――涙目になっている健介ちゃんを窘めるように微笑む。その行動に、神倉先輩たちは唖然としていた。

『ちょっと、お母さん！』

わたしは、気恥ずかしさのあまり、大きく叫んでしまう。もちろん、その声がお母さんに届くことはなかった。

「さぁ、みんなも入ってくださいね～」

先輩たちを招き入れるお母さん。病室の奥には、付き添いが休めるベッドもあり、訪れた人がくつろげるようにソファーも置かれていた。

「え～っと、みんなは真菜と同じクラブの人かしら？」

「あっ、はい！」

慌てて自己紹介を始める神倉先輩たち。なぜだかわからないが、神倉先輩の名前を聞いたお母さんは、意味ありげに微笑んでいた。

「それで……、真菜ちゃんの容態は……？」

若葉さんが遠慮気味に問いかけると、お母さんは困ったような表情で顔を横に振った。

「いろんな検査を行ってはみたけれど、なぜ意識が戻らないのか――原因はわからないらしいの」

「すみません……。ボクたちの所為で……」
「なにもあなたたちの所為じゃないでしょ。真菜はただ運が悪かっただけで……、あなたたちが巻き込まれなかっただけでも良かったじゃない♪」

とんでもないことを呟くお母さんに、神倉先輩たちは目を丸くして驚いていた。
確かに、あの日部活が休みになっていなければ、ここにいた全員が事故に巻き込まれていたかもしれない。それを考えると、お母さんの言うように、わたしだけが巻き込まれただけで済んだのは良かったことかもしれなかった。
それにしても、実の娘が大変な状態になっているというのに、もう少し気の利いた言い方があるのではないだろうか……。わたしは、項垂れるようにして大きなため息を吐く。それが、みんなに対してのお母さんの優しさであることに、わたしはしばらく気づかなかった。

お母さんと神倉先輩たちが喋っている間に、わたしはそっとベッドまで近づいてみる。そして、ベッドを覗き込んで、おもわず息を呑み込んでしまった。そこに寝かされていたのは、紛れもなくわたし自身であったからだ。
目立った外傷は見られないものの、肌の色が青白くとても生きているようには思えない。まるで、精巧に作られた人形が寝かされているようであった。
モニターされている心電図の音だけが、辛うじて生きていることを証明しているようである。いや、こんな状態ではたして生きているといえるのだろうか。
今の状態になってからこれまでのことは、どこか夢の中の出来事のように感じていた。しかし、目の前で眠っている自分を見つめて

いるうちに、急激な不安に襲われてしまう。本当に元の状態に戻れるのだろうかと――

事故を起こしたプラネットメーカーは、開発者でもある優子さんが部室に泊り込んで調べてくれている。だが、事故の原因を突き止めたところで、時空のズレという特殊な事例の理由まで判明するかは不明である。たとえその理由がわかったとしても、時空のズレを修復するのにどれくらいの年月が必要となるのかわからない。また、わたし自身、魂の状態でどれだけ生きられるのかも……。

もしかするとこれから先も元に戻ることができず、誰にも気づかれないまま死んでしまうかもしれない。そんなことを考えているうちに、いつの間にかわたしの瞳からは大粒の涙が溢れ出していた。

わたしが泣いていても誰も慰めてはくれない。何をしようとも誰も気づいてはくれない。わたしは、不安と孤独感に耐えられなくなり、逃げるように病室から飛び出してしまった。

誰もいないのに扉が開かれたため、神倉先輩たちは驚きの表情を見せる。ただ、健介ちゃんだけはそのことに気づいたようで、慌てて何かを追うように病室から飛び出した。

どこをどう走ったのか……、わたしは病院の中庭まで来ていた。フラフラと力無く歩きながら庭に聳える巨木に近づく。わたしは、巨木の根元にしゃがみ込み、両腕で顔を覆うように項垂れた。

『どうして、こんなことに――なったんだろう……』

わたしはギュッと唇を噛み締める。こんな気持ちになるぐらいなら、健介ちゃんの言ったように、病院なんかに来なければよかった。そう考えると、再び涙が溢れてきてしまう。

入院している自分の身体を目の当たりにしなければ、少なくとも不安を覚えず平穏に生活できていたはずだ。これまで通り健介ちゃ

んの部屋で暮らし、何かあれば端末越しに会話をして――
そう……、今のわたしは端末を通してでしか、その存在を証明することができない。その事実に、今更ながら気づかされてしまった。
端末で通話しないと誰にも気づいてもらえない。普通に喋れないことがこんなに辛いものだとは思わなかった。
もし、端末を通してではなく普通に気づいてくれる人がいたとしたら――わたしはその人から離れないよう憑いていくかもしれない。そんな幽霊的な思想にわたしは苦笑してしまう。これでは本当に幽霊のようではないか……。そんなことを考えていると、ポケットに入れてあるカード端末に着信が入った。確認してみると健介ちゃんからの通信のようであった。
一瞬、どうすべきか悩んでしまう。端末越しでしか会話の出来ない現状を、思い知らされることになるからだ。もちろん、このまま回線を開かないわけにはいかない。躊躇いながらも、わたしはカード端末のリアルタイムコミュニケーションツールを起動させた。
モニターに浮かび上がったのは、汗を掻いて息を切らせている健介ちゃんの顔だった。

『健介ちゃん……。病院内は、通信禁止なんだよ～……』
「なぁ～に言ってるんだか……。昔じゃないんだから、治療機器の誤作動対策はバッチリなんだよ」
なぜか健介ちゃんの声が二重に聞こえてくる。驚いて顔を上げてみると、息も絶え絶えな健介ちゃんが目の前にいた。
『け、健介……ちゃん？』
「はぁ、はぁ……。やっぱり、ここにいた」
健介ちゃんは、わたしを見つけて嬉しそうに微笑んだ。
どうして健介ちゃんがここにいるのだろうか。健介ちゃんにもわ

たしの姿が見えないはずである。それなのに、通信もせずにどうやって居場所がわかったのだろう……。そんな疑問が表情に出たのか、健介ちゃんは呆れたように呟いた。

「おまえの考え方は、自分で思っているよりも単純なんだよ。どうせ、入院している方の自分を見て、不安になったんだろ？」

ずばりなことを言い当てる健介ちゃん。わたしは、そんなに単純なのだろうか――

「それに、真菜が落ち込むときは、昔っからこんな木の下って決まってるからな～♪」

健介ちゃんの笑顔を見た瞬間、わたしは涙が止まらなくなってしまった。

誰にもわたしの存在が気づかれなくなったわけじゃない。わたしのことを理解してくれる人は、こんなにも近くにいたのだ。

『健介ちゃん！』

「ちょっ、真菜！」

わたしは、おもわず健介ちゃんの胸に飛び込んでしまう。わたしが触れることで、健介ちゃんが消えてしまう可能性も考えられた。それでもわたしは、感情を優先させておもいっきり健介ちゃんに抱きついた。

姿は見えないが抱きつかれた感触はあるようで、健介ちゃんは激しく慌てまくる。

「えっ……？」

そのとき、健介ちゃんの瞳には、わたしの姿が浮かび上がったように見えたようである。しかし、それもほんの一瞬のことで、わたしの姿は再び見えなくなってしまった。

そのことは、もしかすると時空のズレを修復するヒントになったかもしれない。だが、わたしに抱きつかれた健介ちゃんは、そんなことを考えている余裕などなさそうだ。

顔を真っ赤にさせながらあたふたしている健介ちゃん。わたしの姿は見えないため、傍目からはかなり挙動不審に映っていた。

第１０話　目覚めし真菜の力

お見舞いに行った帰り道、わたしたちアストロクリエイター部のメンバーは集合場所にしていた駅前の公園へ来ていた。メンバー全員の意見を確認して、これからの行動を決めるためである。

それは、わたしたちのクラブ活動の目的である惑星創り……。八月末に開催されるプラネットコンテストへの出場を目指して、学園に禁止されている惑星創りを再開させるかどうかの検討であった。

クラブ活動では禁止されていたとしても、学園とは別のプラネットメーカーを使い――個人的に集まって惑星創りをすれば問題はない。かなり強引な解釈ではあったが、プラネットコンテストを目指すのであればそうするしかないだろう。

幸いにも、代替えとなるプラネットメーカーは確保できている。あとは、惑星創りを再開させるか、みんなの決断次第であった。

「え～、健介から提案のあった夏合宿の件だけど……。個人的には、みんなさえ良ければ惑星創りに挑戦してみたいと考えている」

その神倉先輩の言葉に、健介ちゃんや瑞希は喜び、若葉さんは意外そうな表情を見せた。

「真菜ちゃんのために――という気持ちはわかるけど、何も禁止されている期間中に挑戦することはないんじゃないかしら？　真菜ちゃんの回復を待って、活動禁止が取り消されてからでも遅くはないと思うんだけど……。国内開催とは違うけど、プラネットコンテストは来年もあるわけだし。下手をすると、違反したってことで廃部にもなりかねないんじゃないかな～？」

「いや、みんなには言ってなかったんだけど、このままではどっちにしたって廃部なんだ」

「昴先輩……。それって、どういうことですか？」

神倉先輩によると、アストロクリエイター部は夏までに何らかの成果を上げないと廃部も止むを得ないと、今年度の始めごろに学園側から通達されていたのだという。そこにきて今回の事故と部活動禁止である。夏合宿の話を聞くまで、神倉先輩は廃部になることを覚悟していたようだ。

「じゃあ何もしなければ……ううん、どっちにしたって廃部ってことじゃないですか～！」

「惑星が誕生しなければ、そういうことになるかな」

「そんな～……」

「だけど、夏合宿で惑星創りするのは、成果を上げなければ廃部になるからじゃない。あくまでも野乃原さんのために、もう一度、プラネットコンテスト出場を目指したいんだ！」

『か、神倉先輩……』

不覚にも、わたしは目頭が熱くなってしまった。

諦めかけていた夢を、わたしのためにもう一度目指したいと神倉先輩が言ってくれている。これが嬉しくないはずはなかった。

「そういうことなら、夏合宿に反対するつもりはないわ。可愛い真菜ちゃんのためにも……、惑星創りをがんばりましょう♪」

「か、可愛いって……。まさか夏樹先輩もマナ先輩のことを……」

「まぁ、真菜ちゃんは本当の妹のように可愛いわね～。もちろん、瑞希ちゃんもだけど……。そんなことより瑞希ちゃん。そろそろ素直にならないと、遠野くんに嫌われ――」

「わぁあああっ！　わ、わ、わぁあああーーー！」

突然、瑞希が若葉さんの言葉に割り込むような大声を上げる。な

んだか健介ちゃんの名字が出たように思えるのは気のせいなのだろうか――

「おい、瑞希……。うるせぇ～ぞ……」

「健介こそ、うるさーーーーい！」

真っ赤な顔で泣き叫ぶ瑞希……。こうしてわたしたちアストロクリエイター部は、数日後から始まる夏休みを利用して、ある意味最後の惑星創りに挑戦することになった。

その合宿先で信じられない出会いがあるわけだが、このときのわたしたちは知る由もなかった。

私立白鳳学園高等部の敷地内、北校舎の地下にわたしたちアストロクリエイター部の拠点となる部室があった。

本来なら八月末に開催されるプラネットコンテストを目指して惑星創りに励んでいるところだが、プラネットメーカーの暴走という考えられない事故が起こったため部活動を止められていた。それどころか、わたしたちが部室に近づくことさえ禁止されていた。

そんな立入禁止の部室の中、一人の女性がプラネットメーカーのシステムログの解析に時間を費やしていた。その女性とは、もちろんプラネットメーカーの開発者である如月優子さんであった。

優子さんは、事故の翌日からこれまでの間、昼夜を問わずシステムログの解析にがんばってくれていた。どうやら優子さんは、寝なくても平気な種族のようであるらしい――

いや、そんなどうでもいい情報は置いといて、数日間の徹夜調査の結果、優子さんは今回の事故についてある程度の原因を掴んでいた。これは、それを踏まえた上での言葉である。

「う～ん、こいつは困っちゃったな～……」

なんともいえない表情で苦笑する優子さん。事故の原因について、本当に困ったことが起こったようである。後で知ることになるのだが、それはわたしの命に関わる重要な問題であった。

「で～、何がそんなに困ったっていうの？」

「うん、じつは……って、飛鳥！」

「こんにちは～♪」

突然現われた女性の存在に優子さんはかなり驚いてしまったようである。この驚きようは、単に立入禁止の部室内へ女性が現われたというだけではなさそうだ。

女性は、二十歳前後の神秘的な雰囲気の美人で、優子さんの知り合いのようだ。しかも、ただの知り合いというわけではない。

じつはこの女性、わたしたちの誰もが知っている超有名人であった。ただし、表立った場に出ることはほとんどないため、容姿まで知る者は限られている。実際に、わたしも名前しか知らなかった。

「どうして……飛鳥がここに？」

「う～ん、夏季休暇を纏め取りしたから、実家へ寄るついでに遊びに来ちゃった。まぁ、叔父さんはしばらく神社を留守にしているみたいだけど」

「なるほど～、だからこんなマスコミ厳戒態勢みたいなことになっているわけか～」

二人の話を聞いていると、優子さんが報道規制をかけてくれたというのは、どうやらわたしの勘違いだったようであった。むしろ、飛鳥という名の女性が大きく関係しているらしい。

「そんなことより……、プラネットメーカーの事故に女子学生が巻

き込まれたって聞いたんだけど、どうなってるのよ？」
「あぁ～、やっぱり知ってたか～。じつは野乃原真菜って子が暴走したプラネットメーカーの影響を受けて、魂だけが肉体を離れて別次元に飛ばされちゃったのよ～。しかも、その真菜って子なんだけど、驚いたことに麻衣の一人娘なの……」
「えっ、そうなの！」

その内容に、飛鳥さんが心底驚いたような表情をした。
これも後から知ることになるわけだが、二人はわたしのお母さんと知り合いのようだ。つまり、この飛鳥さんも見た目どおりの年齢とは限らないのかもしれない。

「それで、事故の原因なんだけど……、真菜の隠された力が影響しているみたいね～」
「なに？　その真菜ちゃんって、特別な力を持っているの？」
「持っているっていうか、最近目覚め始めたというか～。その力がプラネットメーカーの中核となるシステムに反応して、時空間を巻き込んだ大爆発を起こした――」
「それって……、どういうこと？」
「飛鳥は知っているよね。プラネットメーカーのメインシステムにあるブラックボックスに何が入っているのか……」
「プラネットメーカーのブラックボックスって……えっ、まさか！」
「そっ、真菜の目覚め始めた力って、時間や空間を操ることのできる……つまり時空力なの。まぁ、過去に現われた三人の時空族に比べれば、無いに等しいくらいの力なんだけどね～」
「ブラックボックス内に存在している時空石の欠片に、真菜ちゃんの時空力が反応しちゃったわけか～」
「そういうこと……。プラネットメーカーって時空石があるからこそ稼働できているわけだけど、そこに想定外の時空力が加わったことで惑星監視システムの速度が急激に速まった。それこそ、一年と

いうプラネットメーカーの惑星監視時間を、僅か一ニ分ほどで再現したわけだからシステムが暴走するのも当然といえるでしょうね～」

……、さっぱり意味がわからない。

プラネットメーカーの暴走した原因について話しているのはわかるが、専門用語が多すぎて今のわたしに理解することはできなかった。まぁ、実際のわたしがこの場所にいるわけでもないのだから、ここで理解できなくても問題はないのだろう。

そのとき、優子さんのカード端末に通信が入る。優子さんが確認すると、それは駅前公園で打ち合わせを終えた健介ちゃんからの通信であった。

一瞬、優子さんは困ったような表情を見せる。しかし、すぐに何事も無かったかのような平静を装い、少しだけおちゃらけた様子で通話回線を開いた。

「健介ちゃん、どうしたの～？　わたしに会えなくて、寂しくなっちゃった～？」

『寝言は寝て言え……』

「って、何ですってーーー！」

今の心境を悟られないように優子さんは戯けてみせる。知り合ったばかりの健介ちゃんには、そんな優子さんの僅かな変化に気づくことはできなかった。

『で～、この前話してた夏合宿の件なんだけど……、部活のみんなと話し合った結果――惑星創りに挑戦することになったから』

「ふ～ん、そうなの？」

『そ、そうなのって……。惑星創りに挑戦することになったら連絡してくれって、おまえが言ったんだろ？　残りのシミュレーション回数を移しておくからって！』

「たしかに、そう言ったけど……。健介ちゃん？」
『あぁ～？』
「これって、人にお願いしている態度じゃないんじゃない？」
『うぐっ……』
「それに、仮にも年上と話しているんだから、ため口はまずいんじゃないかな～？　そんなんじゃ、社会へ出たときに苦労するよ～」
『えっ、何？　もしかして、機嫌……悪いのか？』
「あ、あははっ、そんなわけないでしょ～。まぁ、わかったわ……。ここにあるプラネットメーカーの残ったシミュレーション回数は、向こうのシステムに移しておきます。じゃあ、わたしは忙しいからこれで切るね～」
『ちょっ、おい！』

叫んでいる健介ちゃんを無視するように、優子さんは通信を遮断する。そして、パッと素に返り、頭を抱えながら悶え苦しんだ。

「マズイ、マズイ、マズイーーー！」
「いったい、何がマズイっていうのよ？」

突然騒ぎ出す優子さんに、飛鳥さんはうんざりしたような表情をする。すると、意外に冷静なのか、優子さんは落ち着いた様子で理由を語り始めた。

「いや、さっき話してた真菜のことなんだけど……。今の彼女は、肉体を持たない――限りなく霊体に近い状態で、力の影響をまともに受けてしまうの」
「……力の影響？」
「つまり、稼働中のプラネットメーカーに近づくことで、真菜の魂は微弱ながらも時空力を直接浴びることになる。その結果、どんな影響が出るかはわからないけど、今度は別次元に飛ばされるだけじ

ゃ済まないでしょうね～。下手をすると、真菜の魂が崩壊するスピードも速まるかもしれない」
「たしかに、人の身に時空力は影響が大きすぎる……。真菜ちゃんに目覚め始めた時空力の方も、なんとかしないといけないみたいね――」

そう……。後で詳しく説明を受けることになるのだが、時空力とやらに目覚め始めたわたしは、プラネットメーカーに近づくことができなくなってしまったようである。惑星創造を再開させようというこのタイミングに、とんでもない事実が発覚したものだ。

「う～ん、夏合宿を進めたのはわたしだけど、真菜の行動は制限しないといけないわね～。ねぇ飛鳥……。わたしはまだこのプラネットメーカーの調査で動けそうにないから、飛鳥が真菜たちの夏合宿をサポートしてくれないかな？」
「わたしは夏季休暇で実家に戻る途中――っと言いたいところだけど、麻衣の娘さんが危ないって聞いたらほおっておけないわね～」
「飛鳥、お願い！」
「……わかりました。しばらくはこっちの神社にいることにします」
「真菜の時空力のことはなんとかする……。それまでの間、真菜は離れにでも押し込めといてちょうだい」
「って、それじゃ～あんまりでしょ。プラネットメーカーには近づかないようにしてもらって～、普段はリウムちゃんと行動してもらうことにしましょう」
「なるほど……。リウムちゃんが一緒なら、時空力の影響は少なくなるかもしれないわね～」

二人とも、わたしには理解できない内容でどんどん話しを進めてゆく。
でもまぁ～、優子さんに任せておけば、一番良い方法を選んでく

れるのではないだろうか……。専門家でもないわたしにできること
など、何もないのだから――

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0846m/

アストロクリエイター ～惑星を創った学生たち～

2010年11月25日20時46分発行